

魔法科高校の劣等生と入学した元魔王

yoru07#青薔薇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世で魔王として生きていたルイ・アシユリー。その歴代最強の魔王は戦いによって全てを失いこの世を去った。

そして、ルイは魔法科高校の劣等生の世界に転生する。

これは主人公ルイ・アシユリーが達也たちと過ごす物語である。

追記：メインヒロインは七草真由美を予定しております

注意：オリ主は魔法科高校の劣等生のアニメを見て勢いで書いておきます。原作の登場する魔法の概念やキャラの関わりがよくわからずに書いております。そのため読んでいただく人の中にはここが変とか気に食わないなどあると思いますが温かい目で読んでいただけると嬉しいです。

目次

人物紹介編	
ルイ・アシユリー編	1
エキドナ編	5
吹雪編	8
プロローグ	
0話 全ての終わり始まり	11
1話 出会い	16
2話 中学入学	22
3話 真由美先輩と旅行	34
4話 奇襲	44
5話 弘一の企み	57
高校編	
6話 国立魔法大学付属第一高校	62
7話 トーラスシルバー	70
8話 達也とバトル	75
9話 生徒会	82
10話 生徒会指名	90
11話 部活勧誘期間	100
12話 部活連本部	108
13話 復讐	112
14話 差別撤廃の討論会	122

人物紹介編

ルイ・アシユリー編

ルイ・アシユリー

別名：？

前世は元魔王

神里昂樹は転生前に神にもらった名前

昂樹の能力は全て神能

能力作用はこんな順番

神能＞神託＞権能＞加護の順

能力

5 大能力

・ 神里流

・ 写輪眼

・ エキドナ（理の王）

・ 不死鳥の神能（フェニックス）

・ 星装顕符

サブ能力

七聖魔装（しちせいまそう）

背中に7本の黒い槍の形をしたものを装備できる

この槍は形状を様々なものに変形させることもでき、投擲に使うも

よし、武器として使用するのもよしの便利装備

・ 神里流

昂樹が使う、体術、刀術など、ほとんどが神里流、神里流には自身独自の属性が存在するが、

全属性を持っている。水や氷、風、炎、岩など

水属性なら受け流しに長けていて、岩属性なら防御、氷属性なら細かな攻撃など。

・写輪眼（しやりんがん）

血縁よって開眼する、写輪眼を他人に移植した場合は渡された側のみ渡される時の状態で開眼する。

昂樹の場合は移植である。右眼と左眼で、移植した写輪眼が違うため、能力も別々

一つ巴、二つ巴、三つ巴使用化

能力

動体視力の強化、魔法のコピー、幻術にかける

どの能力も巴が上がるたび上昇する

・永遠の万華鏡写輪眼

（まんげきようしやりんがん）

写輪眼が進化した形

万華鏡写輪眼の固有能力が発現する

・右眼

天照（あまてらす） 物体を発火させる、黒い炎、対照が燃え尽きるまで消えない、炎を発火させることも可能、水に入れても、水自体が燃える

別天神（ことあまつかのかみ）

対象者に幻術を掛けられたと気づかせることなく操ることができる

・左眼

加具土命（かぐつち） 天照及び不死鳥の炎を、自由自在に変化することができる。

剣や、槍、天照で燃えている敵に対し加具土命を変化させ串刺しにすることもできる

月読（つくよみ）

対象者と目が合うだけで発動でき、相手の精神に介入。介入した精神世界では、空間も時間も質量も全ては月読の術者が支配します。「刀で72時間相手を刺し続ける」「24時間殺戮の行われる世界を見せる」など、強烈的な幻術によって精神崩壊を起こさせることも可能

・両眼

完成体須佐能呼（すきのお）

使用者の周りを武士のような像が包み込む
物理、魔法に高い耐久性をもつ

能力を使いすぎると失明するが、他者の万華鏡写輪眼を移植するこ
とにより、失明しなくなる

・万華鏡輪廻眼（まんげきようりんねがん）

万華鏡写輪眼が進化した形

万華鏡写輪眼の能力及び固有能力が発現する

・右眼

闇御津羽神（くらみずは）

自分が支配する空間を自由に行き来できる

（エキドナにより無限に空間を生成、空間を自由に変形できる）
特徴

予備動作及び術式を必要としない

移動先は同空間、異空間を問わず

他者を空間に引き摺り込める

自分の好きな所に空間を開ける

探知不可（異空間にいるため）

左眼

魔女の眼（ソルシエール・アイ）

エキドナの神能「叡智の書」の断片を使うことができる

「叡智の書」は未来、過去などあらゆる事象を見ることができ

ただ昂樹の場合は最大10秒先の未来のみが見れる

他人の魔力量などが見れる

盗聴、透視などが可能

・不死鳥の神能（フェニックス）

身体から発した炎を操る事が出来る。

- ・炎を様々な形に変更な可能。
- 炎を鳥の形にすると、「火の鳥」として思うがまま操る事が出来る。命令を下す事も可能である。
- ・炎熱への耐性有り。また、自分の発した炎を吸収することで体力を回復する事も可能である。
- ・怪我をすると、その部位が燃え上がり再生する。致命傷であつても、死んでいても再生する。
- ・不死鳥の神能は眷属及び信頼する人にコピーを渡すことができる（どうしても神能以下になつてしまう）

・星装顕符（せいそうげんぷ）
昂樹が独自に開発した札型のCAD、紙のようにペラペラしているが全く別物

陰陽師の全ての術装、が使える
普段は白い札だが、
使用したい術装によりさまざまな紋章が浮き出る
演算領域がある人は使えない

エキドナ編

昂樹の能力であり最強の相棒

1度世界を滅ぼしかけた人物

エキドナの強さは当時の最高戦力をもっていた、剣聖、勇者、賢者、聖女をもつてしても、滅ぼしきることが出来なく封印をせざる負えなかった

別名「理ノ王」「強欲の魔女」

喪服のような黒装束に真っ白な長い髪をしている

昂樹の闇御津羽で作った空間にいる

特徴

他の魔女を取り込んだことにより、他の魔女の神能を扱うことができる

強欲の魔女

魔力無限、魔法の威力増加、魔法の詠唱破棄、

魔法の構築から発動時間短縮、

魔法のクールタイム無視、

複数の魔法の展開、発動、操作が同時にできる。

憤怒の魔女

再生能力、不死鳥の神能の劣化版

聖痕は癒やすことができないが、2番めに強力な「死神の神能」の傷は再生することができる

・自分のダメージや痛みを他人に無理矢理共有させる能力

怠惰の魔女

一定範囲の重力と空気を自由に操れる能力

空気を圧縮したり、空気を圧縮し空を歩くこともできる

重力を変更し、デメリットなく浮いたりもできる

重力を倍にして相手を動けなくすることもできる

力的に剣聖すら倒してしまうほど強い

色欲の魔女

無貌の女神

相手を魅了する能力

3つある

相手の見たいものを見せる。相手を攻撃するような能力ではないが、相手の心に取り入れることは簡単にできる。隴火はこれの応用。相手が見たいように見える力のせいで、見た相手はカーミラから意識を逸らすことができなくなる。その影響でカーミラに意識を向けたが最後、目が離せなくなり、次第に呼吸も忘れ、心臓も止まってしまう。

性格なども完全にコピーすることができ、その人物の姿を呼びさまして思い出させることができるため、取り入れるには十分な特徴がある。

嫉妬の魔女

不明

暴食の魔女

自分の意思で魔獣を生み出すことができる。

前世では五大魔獣

ケルベロス、シーサーペント、バジリスク、アジダハーカ、ヒドラを作り出した能力

呼び出すこともできる。この世界でできるかは未知

自分の体を一部魔獣に変化させたりできる

虚飾の魔女

事象を書き換えることのできる能力。

世界を自分の都合の良いように変更することができる凶悪な神能で、直接存在を「なかった」ことはできないが、物理・魔法攻撃は完全無効、その場所にいなかったことにできるなど汎用性が高く、厄介な能力。

対象の記憶を書き換え洗脳することも可能である

概要

剣聖、勇者、賢者、聖女によって神殿に封印されたエキドナだが、2代目魔王により封印が解かれる

それにより2代目魔王に能力として移植されたが肉体が耐えきれず1年で魔王は消滅した。その後幼い頃の昂樹の体に移植された。

エキドナは昂樹が大きくなったら身体を乗っ取り世界を破滅させようと考えていたが、昂樹と共に過ごし、昂樹の作る世界を見て徐々に世界の破滅ではなく、昂樹を守るために能力を使うようになった。そこからエキドナは昂樹の最高の相棒となった。

吹雪編

人物紹介 吹雪編

吹雪（フブキ）

昂樹の式神の1人。前世では魔王四天王の一人。

水と氷の精霊

その名の通り水と氷を司る精霊

特徴

鬼と人と悪魔の血を受け継ぐ精霊

武器は扇子の刀

蒼い角と白い肌、髪は白髪ロング、和服を着ている

見た目はクールビューティーの美女だが

昂樹のことを弟と同じように見て、接しているため、どっちが主人かわからなくなることがある

昂樹をバカにされたりけなされたりすると激怒し敵を完膚なきまで叩きつぶしてしまうのである国では「氷の悪魔」と言われてる。本人はこの呼び名が好きではないらしい。

もうひとりの四天王である毀慧は吹雪と同等ぐらいの強さであり、2人が戦うと世界が消滅するとルイは考えていた。もつともルイがいる限りそんなことは起こらない。

能力

・ 神里流（水、氷属性）

神里流2代目継承者、刀術、扇術をよく使う。刀術では、昂樹と同等の力を持つ。水と氷で攻防一帯でバランスがいい

「九輪・氷冷花（ひょうれいか）」

「一輪」「二輪」「三輪」など数で技を出す回数が変わる

・ 氷水（ひょうすい）の神能

水属性と、氷属性の魔法は昂樹を超える使い手。前世でも世界トップレベルであった。

例

・生成

氷の力により武器をその場で生成することができる。（数に指定はなく魔力が続く限り生成可能）

・凍斬

斬撃に氷を纏わせ、斬った部分を凍傷させる

・絶対零度

周囲の温度を極限まで下げ、相手を凍らせる

・氷霧

氷の霧を発生させ、呼吸し、氷の粒を吸い込んだ相手の肺胞を壊死させる

・血死

相手の血を凍らせて即死させる

・氷柱

水の神能により生み出した雨を凍らせて、空から大量の氷柱を超広範囲に落とし、串刺しにする

水の神能

・水神

体を水に変えられ、全ての物理攻撃を無効化する

・水造

雨や、霧を発生させる事ができる

・水絶

相手の体の水分を抜くことができる

これはあくまで一部であって他にも様々ある

不滅の氷

吹雪が許可しない限り氷の神能で生み出された氷は溶けることがない。どんなに高温で熱せられても溶けるとこはない。ただ溶けなだけでダメージが蓄積すれば壊れることはある。

阻害の神託

対象の能力を阻害し弱めることができる（如何なる相手にも）

魔法や術式の構築の障害もでき、発動までの時間を遅らせる

自身よりも弱い相手にはより強く作用し、自身よりも強い場合にも微弱ではあるが作用することができる。

不死鳥の神託

不死鳥の神能の劣化版

性能は劣るが、蘇生はできる。だが蘇生、再生には本来の不死鳥の神託よりも時間がかかる

プロローグ

0話 全ての終わりと始まり

俺はルイ・アシユリー。魔王だ…。いや元魔王と言うべきか。

俺はある時突然魔王に選ばれた。そして、たくさんの人を殺した。己を、部下を、魔王領の民を守るために。

だけど俺は勇者に負けた。多大なる犠牲を出して。だが勇者は俺を殺さなかった。

勇者は俺に言った「共にこの世界を変えないか？君ならわかるはずだ、この戦争で自ら身を呈して戦った君なら」そう言い勇者は俺に手を伸ばした。そして俺はその手を取った。そして俺と勇者は共に世界を変えた。俺は世界から許された。

それから少しして俺は勇者、全世界の者たちと共に最強災厄の神と戦った。世界の平和のために。

そして、俺は死んだ…。奴の、世界を破壊するの魔法を防ぐために、俺はマナ（魔力）も、そしてオド（生命エネルギー）も全て使い果たし防いだ。

でも、俺は信じている、勇者が皆がヤツの息の根を止めていることに

「皆、すまない、最後まで共に居られなかった」

ルイは静かにそう言うと、体を起こす。

「天国…いや俺が来るなら地獄だ。ならここは？」

ルイは周りを見渡すが周りには何もなく黒い空間が広がっていた
「ここがどこか知りたいか？」

すると突然空間のどこからか声が響いた

「っ！誰だ！…！」

ルイは後ろを振り返った

その瞬間前方に気配を感じた

前を見ると目の前には椅子に座る少女が居た

額からは赤い角が生えており、赤い和服を模している

「だっ…」

言葉を発しようとした瞬間ルイは察した、彼女の異様なまでの気配を

「（この異常なまでの気配… おそらく神、いや邪神か？どちらにしろやばい）」

ルイは考えると同時にすぐに顔を伏せる

「ご無礼を失礼しました、神よ」

その行動に少女は驚きの声を上げる

「ほお、吾の気配を見抜くか… さすが歴代最強の魔王じゃな」

「お褒めに預かり光栄です」

ルイは頭を下げたまま口を開く

だが

「よいよいやめい！敬語は気に食わんのじゃ！普通に話すがいい」

少女は首を振る

「そうです… そうか分かった」

ルイは癖で敬語を使いそうになるがなんとか抑えた

その言葉に神は少女らしく可愛く笑い頷く

「自己紹介がまだだったな。わしの名は紅（べに）。よろしく頼むよ」

紅は椅子の持ち手に肘を突きながら言う

「俺は知っているだろうけど、ルイ・アシュリーだ」

「うぬ。して、戦争の件まだ気になるじゃろ？」

その言葉にルイは激しく反応する

「ああ、気になってた！どうなった？」

ルイは紅に急接近する

「近い近い！結果は勇者の勝利、勝てたのはお主のおかげだな。」

紅はルイの肩を押し距離を取る

「良かった…」

ルイは安心したようにその場に膝を落とす

「そこで、魔王よ、お主には2つの選択肢を渡そう、1つはこのまま魂を変換して天国に行く。そしてもう一つは転生だ」

その紅の言葉に大きく驚く

だがそこで大きな疑問が思いつく

「元魔王にそんなことさせていいのか？」

「構わん構わん、それ、どっちにする？」

紅はルイに選択を迫る

「えーと…（どうする？転生か、それもそれでいいか）」

ルイは考えながらふと気づいたことを質問する

「転生した場合、今までの能力とか全部消えるのか？」

その質問に紅は答える

「その通りじゃ」

「そうなのか（ある程度の予想はしていたがやはり現実を突きつけられるときついものだな）」

「嫌か？」

俯くルイに紅は声をかける

「ああ、嫌かな… なんとかか1つだけとか無理なの？」

その言葉に紅は少し不思議そうな顔をする

「できるが… そのまでお主が必要とする能力は何なんだ？」

「エキドナ、理の王」

ルイは間もなく答える

その言葉に紅はニヤリと不思議な笑みを浮かべる

「なるほど、だが君が話していたエキドナは1つの能力に過ぎない、別のを次の世界でも用意しよう。それでいいか？」

だがルイはそれを拒む

「それだけは嫌だ！エキドナは俺の一生の相棒だ、誰にも変えられない」

ルイは紅の言葉に少し怒りをあらわにした

2人の沈黙が続く

次の瞬間紅が笑い始める

「あっはっはっはっ、冗談じゃ冗談じゃ！ちゃんと持っていけるぞ、お主を試したのじゃよ。もちろん制限はつくが、大体はあっちの世界の神と話がついておるからのお！」

ルイはその言葉を聞き安心する

「良かったー！」

紅が指を下ろすと目の前に白いパネルが現れる

紅は肘を付き顎に手を置きながらパネルを下にスライドしている

「ふむふむ…これは、まあいいか。こっちは、少し効果を下げるか…おい、ルイよ、闇御津羽と共殺しの背骨どっちが良い？」

「闇御津羽が良いな、形見みたいなものだからな」

「よし、これでいいか、ほれ！」

紅はパネルをルイの方に渡す

ルイは渡されたパネルを見るがあることに気づく

「（ん？あんまり減ってないし、効果自体も下がってはいるが、気にならない程度だな）」

「確認はできたか？」

「ああ、大丈夫」

ルイはパネルを紅に返す

「そうだ、伝え忘れていたが、次の世界は魔法という概念が違う。魔法が科学で実現されておる、まあ詳しくは行けばわかる」

「え？でもそれだったら俺が魔法に使う魔力ないよな、」

「あーそれは大丈夫じゃ、どの世界にも魔力はある、それを使うか使わないかのことだけじゃ！」

「なるほど」

紅は椅子から立ち上がる

「では行くぞー！魔王ルイ・アシユリーよ、前世界では大義であった。これからは神里昂樹を名乗るが良い！」

紅はルイ… 昂樹の方に手を向ける。すると昂樹の下に青い魔法陣が現れる

「行つてくるよ、紅」

昂樹の体が少しずつ 少しずつ消えていく

「ルイ… いや昂樹よ、ありがとう… そなたはあの世界を救った。次の世界では楽しく生きてくれ」

紅は本物の少女のように優しく笑う

「ああ、じゃあね」

昂樹が消える瞬間

「心優しき魔王よさらばだ」

その言葉を最後に昂樹の意識は途切れる

昂樹が居なくなっすぐ

「これで良かったのか？エキドナよ」

紅がそう言うと、眼の前にエキドナが現れる

「ああ、構わない。感謝するよ」

「ふふっ」

紅は微笑する

「なにかおかしいかな？」

「いいや、あそこまで人界に降りるのを嫌っていた君が、ここまで変わるにはな」

紅の言葉にエキドナは反応する

「ルイは、私の唯一の理解者になってくれたからだよ。私はルイを誰よりも信頼している。あの日、私は神にならなくて良かったと思うよ」

「神の仕事をバカにするか… まあいい、早く行ってやれ」

紅は少し笑いながらも促す

「決してバカにはしてないさ、ありがとね、紅」

エキドナは紅に笑いかける

「構わん」

そしてエキドナは姿を消し昂樹のところに向かう

1話 出会い

昂樹はゆっくりと目を開ける

「(ここは、どこだ?家?)」

すると目の前に大柄な男が現れる

「(こいつは、)」

その瞬間男が殴りかかってくる

いつもなら躲せていただろう、だが転生してすぐ、体がうまく動かない

「がっつ」

そのパンチは昂樹の顔を正面にぶつかり吹き飛ばす

昂樹はそのまま後ろの壁にぶつかる

「(いってえ、しかも体が軽い。5歳ぐらいか)」

周りを見ると数多くの子供が倒れていた

その男は壁により掛かる昂樹の胸グラを掴み体を持ち上げる。そして立て続けに殴る

「ぐっ、がっ、」

そのまま昂樹を投げ飛ばす

「く、」

すると男が急に前に腕を出した

「(なんだ?)」

そして腕にある機械のようなものを操作する、すると手首に数字が腕を巻くように現れる

「避けねえと痛えぞー!」

その瞬間手から衝撃波が放たれる

そして昂樹の腹に直撃する

「ぐふっつ、、(痛え、、何だこれ。くそが!)」

昂樹は左手を突き出し心のなかで唱える

「(ウインドカッター)」

だが、何も起こらない

「(なっ、まだ体に能力が適合してないのか、)」

その姿をみて男は腕の機械を外し昂樹の腕につける

「これを使わないと、魔法は撃てないぞー」

だが、昂樹が唱えても魔法は発動しない

「チツ、魔法の撃てないのか外れだな、、、一番いらねえ」

男の顔が険しくなる

そして軽々と昂樹を持ち上げ玄関に向かいドアを開け、そのままそとに昂樹を投げ飛ばす

「お前はいらねえー出ていけー！」

男は勢いよくドアを閉める

昂樹は起き上がる

「ふう、、、いきなりこれかよ、、、とりあえず回復するか」

すると昂樹の傷口から炎が出て傷を癒やしていく

昂樹はそのまま歩き出す

その道中

歩きながらエキドナに声をかける

「(エキドナ、いるか?)」

「もちろん、いつでも一緒にいるよ」

エキドナの声が頭の中に響く

「(能力の解析はどうだ?)」

「一応終わってるよ、変更はほぼないね、共殺しの背骨がなくなっただくらい」

「(その他は何もかけてないな?)」

「それは心配ないよ。あと今この世界の基本知識を脳にインプットしてるとこ、今7割ぐらい」

「(流石だな、、、なるほど、今いるのは日本というところなのか、とりあえず、東京?ってところに行こう)」

「そうだね、でも家がないね」

「まあ。取り敢えず行ってみよう」

今は青森県というところの先端らしい、これは骨が折れそうだし

浮遊魔法が使えればいいが、なんにせよまだ体に魔法が適応していない

そして昂樹は何日もかけてあるき続けた、だが、どんなことがあるうと昂樹の能力へ不死鳥の神能〉はその名の通り不死身の能力。心臓を刺されようが、体をバラバラにされようが再生される。もちろん餓死もしない。死んで、生き返って。

「またか、」

昂樹は小さくそう言い倒れる

不死鳥の神能といえど体力が低下していれば再生に時間がかかる

昂樹の意識はそこで途切れる

昂樹は薔薇の香りがして意識が戻る

「(なんだろう、母上の胸の中にいるような感覚がする。温かい)」

昂樹はうつすらと目を開ける。目の前には黒い服が見えた

「んっ、」

昂樹は更に近づいて温もりを感じようと動いた

「ずいぶんと積極的だね、昂樹」

その声で目が完全に覚める

目の前にはエキドナがいた

「エキドナだったのか、それじゃ、起きっ」

起きようとする昂樹をエキドナは抱きしめる

「わっ、」

昂樹の顔に柔らかい何かが当たる

「エキドナ、、、きついよ、、、」

「よし！起きようか！」

そう言くとエキドナは昂樹を放すと同時に昂樹はあることに気づく

「ベッド？ってことは誰かの家？」

「それはリビングに居る彼に聞いてね」

エキドナは目の前のドアを指差す

昂樹は起き上がりベッドから降りる

「そういえば、エキドナは顕現していて良いのか？」

エキドナは昂樹の闇御津羽にいる状態、現実に霊体としている状態、そして顕現している状態の3つがある

「うん、大丈夫」

昂樹はそれを聞くと近くのドアを開ける

そこはまるで前世の家の中ではないかと思うぐらいだった。全体的にログハウスに似ていて、窓には花などがかけてあった。そして窓の下のベッドには18歳ぐらいの好青年が本を読んでいた

そしてその青年はこつちを向く

前世でかなり多くの美男美女を見てきたがその昂樹でさえ美貌を感じさせられるほどだった。

髪は黒色で、整った顔立ち、目は白色だった

「少年、こつちに来てくれないか？」

その声はかなり大人びていて、昂樹は声に促されるままにその青年のもとに向かいベッドの横にある椅子に座る

「あなたは、、、」

昂樹の質問に答える

「僕は優、山本優だ」

「俺は神里昂樹、5歳だ」

2人はお互いに自己紹介をする

「5歳か、不思議だね君は、君の顔はよく見えるよ、、、」

昂樹は優の目を見て気づく

「優さん、あなた眼が」

「ああ、見えない。病気でね、もう僕の命は消えかけている。いや、今日今なのかもしれない。」

優は昂樹を見ながら優しく微笑む

「そんな、エキドナ治せないのか？」

後ろにいるエキドナに問いかける

「すまない、僕の叡智の書に今この世界の知識がほぼ入っていない現状治すことはできない」

エキドナは俯く

「なんとか、なんとかならないのか、、、」

少し焦りを見せる昂樹を優はゆっくりとなだめる

「いいさ、僕はここで、終わりたい。この家で、母さんと父さんのところへ行かせてほしい。もう苦しむのは嫌なんだ。」

その悲痛なまでの顔と声これだけでわかる

「そうか、、、悔しいけどそれなら引き止めはしないよ」

「でも、心残りはある、、、」

「心残り？」

「学校生活をしてみたかった、、、友達と話して、放課後遊んだり、、、恋愛もしてみたかった。あとはもう一度、この家が賑わうところを見てみたかった。笑顔が、綺麗に輝く料理。それが心残りかな。でも、僕が死んだらこの家は壊されてしまう、、、」

優の顔を見る昂樹はわかった。もう長くはないと

「なあ優さん、もしよければ俺がこの家を引き取ろうか？」

その声に優の目が少し開く

「いいのか？昂樹くん、、、」

「ああ、俺は行くところないからな、助かる」

優の目から涙が流れ落ちる

「ありがとう、、、」

すると、優は静かに息を引き取った

「最後嬉しそうで良かった」

「会えると良いね、家族に」

昂樹は後ろを向き家の中を見ようとすが、あることを思いつく

「エキドナ、優さんを吸収して再現できないか？」

「それはもちろん可能だけど、、、」

「俺は優さんの姿でこれから生活しようと思う、彼の願い、学校に行くことを叶えてあげたい」

昂樹はエキドナ眼を見る

「わかった、やってみよう」

エキドナは優の心臓に触る

「解析鑑定」

すると昂樹の体に優さんが吸い込まれていく

数時間後

「よし、このぐらいいいかな」

昂樹は家の整理をした

2話 中学入学

時が経ち7年後

なぜ7年なのかというときキドナに実年齢合わせたいからという理由で止められ、永遠と魔法の研究に明け暮れていたのだ。だがどうしても昂樹はこの世界の魔法を使うことができなかつた。キドナ曰く昂樹の中に魔法を構築する〈魔法演算領域〉と呼ばれるものがないらしい。

「キドナ！行くぞ〜」

昂樹は玄関からキッチンに居るキドナに話しかける

「僕はいつでもここにいますよ」

昂樹の脳内にキドナの声がする

キドナや昂樹は並列思考と呼ばれる独自の思考を生み出し操作することが可能なのである

「そうだった！」

昂樹は勢いよくバッグを背負いドアを開ける

いつもの道を抜け、学校に向かう

学校につくと案内をうけ体育館に向かう。体育館にある椅子に座り、少し時間が経つと校長先生の話が始まった

その後はクラスを見て、クラス内での自己紹介が始まった

昂樹は席を立ち上がり話し始める

「こんにちは、神里昂樹です。好きなものはおはぎです。料理が得意です。嫌いなもの特にないです。あとは体術、剣術は得意なのでなにか困ったりしたらいつでも聞いてくださいね」

みんなは拍手を送る

そんなこんなで初日のオリエンテーションが終わり、部活動見学の時間になった。

「さあ、どこに行こうかな？」

昂樹は校舎を出て、中庭を歩いている

少し歩くとガラス張りのコートが見えてきた、テニスコートに似て

いる

その中では2人の女性がボールを打ち合っていた

昂樹はそれを見ながら近くのベンチに座る

少し見ているとラリーが終わり1人の女性がコートから出ていった

「(すごいな)」

そんなことを考えていると後ろからトントンと軽く肩を叩かれる

「はい」

昂樹は返事とともに後ろを向く

そこにはさっきまでラリーをしてた女性がタオルを持ちながら立っていた

「あのくなにかご用でしょうか？」

その女性は首をかしげながら言う

「えっと、、、」

女性は気づいたように昂樹より早く話し始める

「その、私をずっと見ていたので、なにか用事があるのかなと」

「(この人、距離が近い、、、)えっと、お二人の勝負を見てつい見とれてしまっただけです」

「ふふっ、そうですか？」

女性は嬉しそうに笑う

すると女性は昂樹の服装を見て

「あなた、1年生ね？部活の見学ですか？」

「はい、さっき通り見て歩いていたらお二人が試合をしていたのが見えて」

女性は昂樹の話を聞くと

「そうなのですか、でも私は部員ではありませんよ？気晴らしにここに来ただけです」

昂樹はその言葉に驚いた

「え？てっきりエース級の方なのかと思っていました」

「それはごめんなさいね。自己紹介が遅れたわ、私は七草真由美。現

生徒会長よ」

「、、生徒会長?!それは失礼しました。僕は1年c6組の神里昂樹です。」

「神里くんね、よろしく。それでなんだけど、クラウドボールやってみる?」

七草先輩は銃型のCADを昂樹に渡してくる

「是非!やらせてもらっても良いですか?」

「ええ!」

ニコツと笑い遠くにいる女性に話しかける

「結菜!こっち来て〜!」

七草先輩が昂樹から目を話した瞬間こんなことを考える

「(七草、、ナンバーズか)」

数字付きヘナンバーズとは、日本において優れた魔法の遺伝的素質を持つ魔法師の家系を指す隠語である。1から10の数字が名前に入っているのが目印でもある。

「神里くん、この子がこの部の部長結菜(ゆな)よ」

昂樹はすぐに七草の方を見てお辞儀をする

「結菜さんよろしくお願いします」

「うん!よろしくね」

結菜さん、おしとやかで優しそうなショートの女性

「では、さっそく始めましょうか」

結菜さんはCADを持つとコートに入っていく

「はい」

昂樹も続くようにコートに入る

クラウドボールとは、圧縮空気を用いたシューターから射出された直径6センチの低反発ボールを、ラケットまたは魔法を使って制限時間内に相手コートへ落とした回数を競う競技のことである

コートで対面した2人、先に結菜先輩が口を開く

「神里くん今日はボール2個で、シールドは無しね」

「了解です」

コート内に2つのボールが射出される

2人はボールを追いながらも、打ち返し合う

「(やっぱり上手いな、でもエキドナ!)」

「(任せて、空間色覚)」

その瞬間昂樹の周りの動きが遅くなる

「(ここか!)」

昂樹はボールに追いつくと同時にさっきのテンポよりも早く返す

「くっ、(この子いきなり速く!)」

だがさすが部長、そんな攻撃は何度も経験している

「はっ!」

ボール2個の多重ドロップ

「まだっ! (神里流・神速)」

そのボールを目にも留まらぬ速さで返球する

だが、返した先にはすでに結菜先輩が居てきれいに決められた

「まじかー強いなー」

昂樹は立ち上がり結菜先輩と握手を交わす

「2人ともなかなかいい戦いだったわよ」

七草先輩は拍手しながらコートに入ってくる

3人はそのままコートを出て、昂樹は荷物を背負い帰宅しようとする

「まっつて神里くん。明日の放課後に生徒会室に来てほしいの、予定あったりする?」

「えっと、特にはないので、行かせていただきます」

昂樹はそう言ってお辞儀をし帰っていく

「ねえ真由美、不思議な子だったね」

「ええ、でも是非とも我が生徒会、風紀委員にほしい逸材ね」

「あの子を?なんで」

「だって、あの反射速度と情報処理能力なかなかのものでしょ?」

「まあ確かにね」

2人は帰宅する昂樹の背中を見ていた

次の日の放課後

教室からでた昂樹は生徒会室に向け出発した

「あれ、そういえば。俺生徒会室どこか知らないわ」

そう昂樹は生徒会室の場所を知らない

「誰か、いないか？」

昂樹がまわりを見渡していると後ろから声がかかる

「おい、どうした。大丈夫か？」

昂樹はすぐに後ろを向き状況を説明する

「えっと、生徒会室に行きたいのですがわかりますかね？（この服三年生か）」

すると女性は昂樹に聞こえない小声で

「なるほど、君が、」

「どうしました？」

「あ、いや何でもない。生徒会室だったな、私が案内しよう」

「ありがとうございます！」

昂樹は小さくお辞儀をする

「そうだ、自己紹介がまだだったな。私は渡辺摩利だ、よろしくな」

その女性は身長160センチぐらいで、ストレートのショートボブの黒髪で、とてもクールな感じがした

「僕は1年c6神里昂樹です」

「神里くんか、では行こうか」

「はい」

少し歩くと生徒会室が見えてきた

「よし、着いたぞ」

「渡辺先輩ありがとうございます。」

「気にするな。それじゃあ、入るか」

すると渡辺先輩は生徒会室のドアをノックする

「真由美、入るぞ」

「あ、摩利？どうぞ入ってー」

ドアを開けて生徒会室に入る

そこは七草先輩がいて、奥の大きな椅子に座っていた。

「摩利、いらつしやい。それと、昂樹くんも一緒なのね？」

「ああ、さつき道に迷っていたところをちようど見つけてな。連れてきた」

「本当！ありがとうございます。それじゃあ昂樹くんここに座って」

七草先輩は席をたち、生徒会室の真ん中にある椅子に昂樹を案内する

「はい、失礼します」

昂樹は促されるまま椅子に腰掛ける。一方渡辺先輩と七草先輩は昂樹と対面するように席につく

「それで、早速話のことなんだけど。昂樹くんあなたに風紀委員会に入ってほしいの」

座るとすぐにとんでもないことを言い出す七草先輩。その言葉に動揺する昂樹

「お、俺がですか？理由をお伺いしてもよろしいですか？」

「ええ、構わないわ。理由はね、昨日昂樹くんが結菜とクラウドボールをしたでしょ？あの時の自己加速術式と情報処理能力を見てビビッと来たのよ！」

七草先輩は昂樹に全くわからない何かを感じたようだ

「は、はあ…」

その言葉にどう返して良いのかわからず微妙な反応をしてしまう

「あのなあ、真由美…」

そんな無茶苦茶な理由にさすがの渡辺先輩も反論しようとする

「まあ、でも生徒会長直々のご指名を断るのは礼儀知らずというものですね。七草先輩がそうおっしゃるなら入ります。」

その言葉に七草先輩が席を立ち渡辺先輩の方を向く

「本当!!摩利良かったわね！」

「ああ。こちらからしては風紀委員は人手が全く足りないから嬉しい話だが、良いのか昂樹？」

「ええ。というか渡辺先輩も風紀委員なんですか？」

「ああ、私は風紀委員長だからな。昂樹にはこれから私の下についてもらうことになる」

「後ついでに私の護衛してもらおうかしら」

「またもや七草先輩のいきなり仕事増やしが発動した」

「ちよつと待つて下さい、風紀委員会はまだ良いとして護衛は3年生の渡辺先輩がすべきではないですか？」

すると渡辺先輩が口を開く

「護衛は風紀委員長、そして生徒会長指名の1人が請け負うことになっている」

「でも僕は1年生ですよ？」

「いいのよ！私が指名した人がなる決まりなの！」

「う…分かりました」

そこから1時間ほど風紀委員会の取り組みや規約などの説明を受けた

「よし、昂樹そろそろ終わりだな。とりあえず今日はここまでだ。」

「昂樹くんお疲れ様」

「はい、七草先輩、摩利先輩も色々教えていただきありがとうございます。僕はそろそろ失礼します」

昂樹は椅子の横にあるバッグを背負いながらドアに近づく

「はーい。明日からよろしくね！」

昂樹はドアノブに手を置く

「(… やっぱり話したほうがいいか…)」

「僕は昂樹のしたいことに従うよ。彼女たちも悪い人ではない。嘘をついている傾向もないから大丈夫」

「(そうか…) あの、七草先輩先輩、渡辺先輩。共に生徒会をやる身として、知っていてももらいたいことがあります」

昂樹はドアノブから手を離して後ろを向く

「話したいこと？」

昂樹の言葉に疑問を抱く渡辺先輩

「実は僕、魔法が一切使えないんです。七草先輩がおっしゃった自己加速術式はただの体術で加速しただけなんです」

昂樹はこれまでのことを話した。もちろん転生のことや、前世の事は話さなかった。だけど、2人は気づいていたと思う。なぜなら昂樹は嘘が苦手なのだ、目線や動きがわかりやすい
「なるほどね」

「でも、昂樹が強いことには変わらない。だから風紀委員会はそのまま続けてもらおうぞ」

「はいー」

時は進み1年後

昂樹は1年間学校生活の殆どを真由美先輩、摩利先輩と過ごした。

そして2人の卒業式当日

いつもどおり生徒会室に向かうと、2人がいた。

「昂樹くん、1年間本当にありがとうね。あの日は急な話だったけど、受け入れて、仕事もしっかりこなしてくれてとても助かりました。」

いきなりの感謝の言葉に驚く昂樹

「そんなことはないですよ。僕もお二人がいたからこそまでがんばれました」

「昂樹くんもしかして泣いてるの?」

昂樹はハツとして頬にふれる

「い、いいえ。これは。俺の水魔法ですよ」

「そうなのか?君は魔法が使えないんじゃないやなかったか?」

「そうですね。改めて生徒会長、風紀委員長1年間本当にお世話になりました」

昂樹は深々とお辞儀をする

そしてこの日2人は中学を卒業した

と、思っていた次の日

昂樹のスマホが鳴り始める。

「はい」

「昂樹くん、真由美よ。急だけど今日は予定とかあつたりする?」

「ありませんけど、どうかしました?」

「予定ないなら今日渡私の家に来ない?」

「真由美先輩がいいなら良いですよ」

「りよーかい! 摩利も呼んでるから1時間後に中学校の前で集合ね」

「OKです」

1時間後昂樹は中学校の前に来てた

「よーし着いた... 2人はまだいないみたいだな」

昂樹は目線をあげ誰もいない中学校を見る

「真由美と、摩利先輩がいない学校か...」

「つまらない?」

「つまらないのか?」

突然後ろから真由美先輩と摩利先輩が耳元で囁く

「うわあ! びっくりした〜」

それに昂樹は驚く

「それにしても私らも信頼されているな」

「そうねー1年間ほぼ一緒だったからね〜」

すると真由美先輩は小悪魔みたいな笑みを浮かべて昂樹に近づくと

「昂樹くん私達のことを好きになっちゃったのかな?」

「そ、それは。そんなことは」

「ふふっ。かわいい」

「おいおい真由美そんなからかうなよ」

「あら、ごめんなさいね。そろそろ行きましようか。」

そして真由美先輩の家の前につく

真由美先輩が家の鍵を探している間昂樹がソワソワしていると摩

利先輩が話しかけてくる

「どうした？緊張しているのか？」

「そうなの？昂樹くん」

「実は俺、女性の家に行ったことがなくて…」

すると摩利先輩は意外そうに話し始める

「なんか意外だな」

「どうしてですか？」

「いや、昂樹は顔もいいし、性格も良いだろ？だからクラスの女子とかにモテモテだと思っただけだからな」

「確かに、そうね。意外だわ」

「俺は人付き合いが意外にも苦手なんですよ」

昂樹はそう言いながら真由美先輩の家に入る

すると奥の部屋のドアが開き、2人の少女が出てきた

「昂樹くん紹介するね。私の妹の香澄と泉美よ」

「よろしく2人とも」

「さー入って入って！」

「お邪魔します」

昂樹と摩利先輩は靴を脱ぎ部屋に入る

奥の部屋に行き3人は椅子に座る

すると真由美先輩が口を開く

「さつき昂樹くんだったでしょ。寂しくなるって」

「それまだいいですよ？」

「からかってるわけじゃなくてね、高校だって一緒になることもあるでしょ？」

「そうだな、昂樹には是非ともうちの高校の風紀委員会に入ってほしい。君は優秀だからな」

「お二人共。僕はもともとそのつもりです。絶対行きます」

「良い覚悟だ」

少し雑談をして、昂樹が話し始める

「僕からもお話良いですか？」

「ん？どうした？」

「俺はお二人を世界で一番信頼しています。なのであの時言えなかった僕の真実を話します」

その言葉に緊張を感じる2人

「それでは行きます。2人とも手を出してください」

2人は昂樹の言う通り手を出しに出す。昂樹はその手に触れる

「エキドナ頼む」

次の瞬間目を開けると、

あたりは家ではなく、草原が無限と広がっていた。雲ひとつない晴天。あ高い風が吹いている

「ここはどこ？」

「わからない。ここは昂樹の心の中なのかもしれないな」

すると近くにパラソルが見える

2人はそのパラソルに近づくと1人の女性が椅子に座りながら紅茶を飲んでいた

その女性はこちらに気づいたのか椅子から立ち上がる

「来たか二人共。さあ座ってくれ」

2人は女性に言われるがまま椅子に腰掛ける

「改めて。こんにちは。ボクはエキドナよろしくね。理の王とか呼ばれてる。昂樹の四大能力の一つさ」

エキドナと名乗った女性は白髪髪と黒装束。真っ白い雪のような肌。そして美しい顔立ちをしている

「私は七草真由美です。昂樹さんの友人です」

続けて摩利先輩も紹介をする

「私は渡辺真莉。同じく昂樹の友人です」

「なるほど、君たちがここに入ってきたことは、昂樹が話す気になったのか…」

「昂樹くんはそう言っていました」

「よし、なら話そう。これからボクが話すことは嘘一つない真実の話だ。いいね？」

「はい」

「まず昂樹は転生者だ」

その言葉に疑問を抱く

「転生者？」

「転生者って、別の世界から新たな身体を持って生まれるということだったような…」

「そうだから魔法を使うことが出来ない。だが前世の魔法は使える」

そしてエキドナは昂樹事を包み隠さず全て話した

「というわけだ」

その話を聞いた2人は暗い顔をする

「まあ、そんなに落ち込まないでくれ。昂樹は2人と出会って更にあかるくなった。大丈夫さ」

「でも、エキドナさんは4大能力の一つなんですよね。残りの3つはなにか聞いてもいいですか？」

「うーん細かくは言えないが、神里流、不死鳥の神能、写輪眼そしてボクエキドナ。それで4つだ」

「なるほど、どれも強力そうだな」

「そうだ2人とも高校のことだが、確実に合格はできる。しかし2科生だと思っついてほしい」

「もちろんよ！2科生でも大丈夫」

「そうか分かった。私が話せるのはここまでだ。ではまた2年後」

すると周りが白くなり始め、次に目を開けると元の部屋にいた「どうでしたか？エキドナと話せましたか？」

「話したよ。とても重い話されたけど」

「だが、高校は絶対受からせるそうだ、頑張りな」

摩利先輩は昂樹の肩に手を置く

「もちろんです」

3話 真由美先輩と旅行

前世のことを真由美先輩と、摩利先輩に話してからすぐのこと。

昂樹がベッドに入ろうと準備をしていると電話がかかってくる

「電話か…。」

昂樹はそのまま電話を取る

「どうしましたか？真由美先輩」

そう、電話をかけてきたのはこの前卒業したばかりの真由美先輩だ

「昂樹くん？今大丈夫？」

「大丈夫ですよ」

「あのね、今度私の卒業祝いで七草家が持つてる島に行く予定なんだけど一緒に来る？」

「真由美先輩のお誘いは嬉しいのですが、家族間のお祝いごとに家族外の人間が関わるのは良くないのではないのでしょうか？」

すると真由美先輩は少し悲しそうな声を出す

「昂樹くんなら来てくれると思ったのに…。」

その声を聞いて昂樹は咄嗟に声を出す

「いやでも、真由美先輩がいいというのであればもちろん喜んで参加させてもらいますよ」

「ほんとに？」

「ホントですよ」

するとすぐに真由美先輩の声色が戻る

「それじゃあ決定ね！泣き落とし作戦良かったかな？」

昂樹はすぐに理解し「しまった！」と思った

「真由美先輩、俺が泣き落としが弱いのをしつててやりましたね！」

「さて？なんのことでしょうね」

結局真由美先輩の泣き落とし作戦にまんまと騙された昂樹はついていくことになる

それから2日後

「ここら辺かな」

昂樹は空港に入ると待ち合わせ場所で少し待機する

少しすると遠くから真由美先輩が手を振りながら走ってくる

「昂樹くんー!」

それを見て昂樹は、真由美先輩に声をかける

「真由美先輩気をつけて!」

「大丈夫よ!ほら行きましょ!」

真由美先輩は合流したと同時に昂樹の手を掴み歩き出す

真由美先輩の服装は白色のワンピースで裾のところが朱色のような花柄、大きめの白い帽子をかぶっている

真由美先輩に手を引かれ飛行機の席に座る

「ファーストクラスですか、さすが七草家ですね」

昂樹は周りを見渡しながら真由美先輩に話しかける

「こっちの方がゆっくりできるでしょ?」

真由美先輩は昂樹の方を見る

「それは確かに」

そんなことを話していると少しして飛行機が離陸を始め空へ飛ぶ

上空行くとすぐに真由美先輩が口を開く

「昂樹くんはそういえばこっちの世界に来て飛行機初めて?」

昂樹はその質問に確かにと思いつつも返事を返す

「あ、確かに。そうですね、前世ではこんなに文明は発展してなかったし、飛行魔法でどうにかなっちゃってましたからね。そう考えると便利なものですよ」

「そう?でも、不思議よね」

昂樹はその言葉の意図がわからず聞き返してしまう

「不思議?」

「そうよ、だって昂樹は別の世界の人でしょ、そんな人と出会うなんて、不思議だと思っわよ」

「まあ、たしかにそうですね。でもこの世界も居心地がいいですよ、前世は安心して行動できるなんて考えられなかったですから。一瞬でも油断したら殺されてますから」

「それじゃあ、今からでもゆっくりしてね。」
「そうします。」

少しすると昂樹は寝てしまっていた。

真由美はパソコンで作業をしている

すると真由美は少しするとパソコンを閉じて昂樹をを向く

「いつも心強い昂樹くんだけど、寝顔は可愛いわね」

真由美は試しにほっぺたをツンツンしてみる

「んん」

昂樹はそれに反応し少し動く

「ふふふっ、可愛い」

すると昂樹は小さな声でこう言った

「アニ… ラス…」

「アニラス？… 誰だろう…？エキドナさんの話にも出てこなかったわね。気になるけどいつか話してくれるかも」

そんなことを考えながら真由美は姿勢を戻す

すると昂樹が真由美の方に寄りかかって昂樹の頭が真由美の肩に

乗っかる

「っ…」

その瞬間、真由美は自分の体が熱くなるのを感じた

「昂樹くん…」

真由美は小さな声で呼びかけるが昂樹は寝たままだ

「もお… ずるいよ…」

到着少し前、機長アナウンスと共に昂樹が目を覚ます

「う、うーん」

昂樹はゆっくりを座席をもとに戻す

「起きた？昂樹くん」

「はい」

「ゆっくりできたかな？」

「かなりリラックスできました」

「それはよかった！そろそろ着陸よ。シートベルトはしっかりね」

着陸し飛行機を降りる

「着いたー」

昂樹は飛行機を降りると大きく体を伸ばす

「長旅お疲れ様。でもまだまだここからよ！」

真由美先輩はまだまだ元気そうだ。昂樹はなれない飛行機だけで疲れが少し残っている

「真由美先輩は疲れてないのかーさすがなれているだけあるね」

「そうね、もうなれたものだわ」

空港で七草家の人と合流し、船に乗り島を目指す

その道中

「船は大丈夫なの？」

真由美先輩は飛行機の件で心配だったのか声をかけてくれる

「船は大丈夫、前世でも船はありましたから」

すると真由美先輩は海の方を見ながら口を開く

「ねえ、一つだけ質問いい？」

「ええ、構いませんよ」

「あのさ…アニラスさんって誰なの？」

その意外な質問にとっさに口が開く

「どうして…なんでその名前を…」

昂樹は驚いてとっさに真由美先輩を見る

それを見て真由美先輩は説明を挟んでくれる

「えっとね、昂樹が飛行機で寝ているときに言ってたからかな」

「そっか、でも聞かれたのが真由美先輩で良かったのかも。アニラスは前世での俺の奥さんだよ」

「奥さん…？そっか、ありがとう答えてくれて」

「大丈夫ですよ」

その時真由美先輩がすこし暗い顔をしたのを昂樹は気づかなかつ

た

船を降り七草家の別荘につくと、香澄（かすみ）・泉美（いずみ）が出迎えてくれた。2人とは真由美先輩の家に行ったときに割と仲が良くなった

香澄は癖の無いショートカットのボーイッシュな少女で見るからに活発で体育会系というか好戦的な気配を放っている。

泉美は肩に掛かるストレートボブのフェミニンな少女、文学少女というか、お淑やかでおっとりとした空気を纏った雰囲気がある。

二人は一卵性の双子で肉体的に同一の遺伝子を有しているので、魔法演算領域の特性も一致しているから、乗積魔法が使える。

ついでに乗積魔法は複数の魔法師の魔法力を掛け合わせて一つの魔法を発動させる技術。魔法式の構築と事象干渉力の付与を分担して一つの魔法を発動すること。

「昂樹さんこんにちは！」

「いらつしゃい、神里さん」

2人は挨拶して、荷物を持ってくれる

「いいよいよ、自分で持てるから。香澄はまだ苗字なのかよ、名前でいいって」

「そう？ならいらつしゃい昂樹さん！」

すると奥の部屋から出てきた1人の男が近づいて来る

「さっそく仲良くなったのか？香澄、泉美」

「お父さん。昂樹さんは1度家に来てくれたのでそのときに仲良くなりました」

「そうなのかい泉美？神里くんはじめまして七草弘一（こういち）です。よろしく頼む」

弘一さんは眼帯の少年魔法師と呼ばれているすごい人。ある事件をきっかけで片目を負傷し今は義眼をしている

「はじめまして、神里昂樹です。この度はこのような大切な行事に参加させていただきとても嬉しく思います」

「さすが真由美が認めた人だね、しっかりしているよ」

「昂樹くんはしつかりものだもの」

「(どう考えても2人の間には確執があるな)」

そこから七草家長男智一(ともかず)と次男の孝次郎(こうじろう)と挨拶を交わし、真由美先輩に案内され自分の使う部屋に入る。

そこからは、真由美先輩と話したり、卒業のお祝いをして楽しんだ。家族の団らんが少なかつたのは怖かったがまあ気にしないでおう

夜

コンコンコン

部屋にノックがかかる

「はい」

「泉美です。昂樹さんお風呂空きましたよ」

「泉美か、了解すぐ入るね」

「よろしくおねがいします」

昂樹はすぐに着替えを持って下の階に降りる

そのまま脱衣室で服を脱いで、風呂場で体を洗う。

そして、湯船に浸かる

「ふーっー疲れが取れるねー」

一方その頃

少し外出していた真由美が帰ってくる

「香澄ちゃん、お風呂開いてるかな?」

「開いてるよ、さつき泉美がお風呂から出てきたから」

「わかったわ、それじゃあはいってくるわね」

真由美は着替えをもつて風呂場に行き入る準備をする

すこしして

「お姉ちゃん帰ってきた?」

髪を乾かした泉美が香澄に話しかける

「お姉ちゃん?さつき帰ってきたよ」

「いま昂樹さんお風呂入ってるから、次入ってって伝えてもらえる?」

「わかった……え？待って今昂樹さんお風呂？」

「そうだけど……」

「私お姉ちゃんに風呂入っていいよって言っちゃった」

泉美、香澄「大変!!!」

2人は知らなかった。もう手遅れということに。

風呂場

ガラガラガラ

突然お風呂のドアが開く

「ん？」

なんだと思い昂樹はドアの方を見る

「昂樹くん……？」

そこには顔を真っ赤に染めた真由美先輩が立っていた

たまたま大事な部分はタオルで隠れているが、腰のラインや肩の近くは全く隠れていない

よかったな俺、真由美先輩もかなりの美人だから前世でアニラスが妻じゃなかったら今頃冷静じゃいられなかったかもしれないぞ

「とりあえず落ち着いて、外に行きましようか」

「(どうして昂樹はあんなに冷静なの……)」

「(なんとか外にい出てくれれば……誤解だけは避けられる)」

こんなことを思っていると真由美は風呂場の椅子に腰掛け髪を水で流し始める

「(これでも冷静でいられる?)」

「ま、真由美先輩、な、何考えてるんですか!」

昂樹の言葉を見無視し真由美先輩は話しかける

「ねえ昂樹くん後ろ見ないから背中流してくれない?」

髪が水に濡れストレートになり普段とは全く別の雰囲気纏った真由美先輩の姿に何も言えない

「……え? (やばいやばいほんとにやばいよ、どうしたの真由美先輩。俺耐えられないよ、美人すぎだろ)」

「(ちよっと私何をやっているの! 昂樹くんは後輩でしょ)」

お互いの思考が交差する中、昂樹は浴槽からでて、タオルを取る
「そ、それじゃあいきますよ」

「うん」

お互い顔を真っ赤に染めながら近づく

ドタドタドタ

外から足音が近づいてくる

「泉美が気づいてくれたか！いやでも、この状態を見られるのはまずいい！」

「ごめんなさい！闇御津羽神」

昂樹は瞬時に闇御津羽神で風呂場と脱衣所の空間を通し真由美先輩を風呂の脱衣室に飛ばす

「きやあ」

「怪我はないはず。ごめんなさい」

昂樹は真由美先輩に心のなかで謝る

ガラガラガラガラ

「お姉ちゃん待つて！」

そのにはタオルで体を隠し、尻もちをついてる真由美がいた

「香澄ちゃん…」

「待に合わなかった…」

無事に風呂から上がり自室に戻る昂樹

「ふーなんか、休めたのか休めてないのかわからんな」

昂樹はベットに腰掛ける

「まあ、とんでもアクシデントはあったがゆっくりはできたと思うけど？」

エキドナは具現化し昂樹の隣に座る

「まあ、真由美先輩のあれには流石の俺も驚いたよ」

昂樹はエキドナを見ながらいう

「アニラスに怒られるぞそんなこと言ったら」

「確かにそーだな」

「そういえば、ふと考えたのだが昂樹はどうしてボク含め式神達に敬

語を使わせないの？」

「そりゃ俺の方が地位自体は上だけどさ年齢的には俺が一番下だし、みんなにはお世話になってるからね。吹雪に関しては元人間だし。毀慧は遥かに俺より年上だし。楓に関しても神里家初代当主だからね。特にエキドナに関してははいないとダメな存在だからこそその敬語なしかな。」

「確かに、吹雪達は少しばかり敬語を使ってるね」

するとノックがかかる

「おっと、時間かな」

そう言つてベッドから立ち上がりエキドナは姿を消す

「真由美よ。昂樹くん少しいい？」

「あ、大丈夫ですよ」

真由美先輩はドアを開けて部屋に入る

そして昂樹が座るベットの隣に来た

「隣いいかしら？」

「どうぞ」

真由美先輩は座るや否や

「さつきは本当にごめんなさい。」

「いやいや、大丈夫です。あんまり気にしないでください。」

「そのこともそうだけど、その後のことも」

「それも気にしないでください」

「そう？ 私ねどうも昂樹くんの前だと時々我を忘れてしまいそうになる時があるの」

よくわからない質問で明確な答えが出てこない

「そうなんですか？」

「そう、なんでかな」

「、、、、」

「そうよね、ごめね変な質問して」

「全然大丈夫ですよ、俺真由美先輩と話すの好きですから」

昂樹は真由美先輩の方を見て微笑む

「っ…」

真由美先輩の頬が赤く染まる

「そ、それじゃあまた明日もよろしくね、おやすみ」

真由美先輩は逃げるように部屋から出て行く

「あ、はい。おやすみなさい」

「なんだったんだ…？」

するとエキドナが脳内で言う

「昂樹はほんと疎いわね」

「どゆこと？」

「なんでもない、明日も早いものだから寝なさい」

「了解、わかったよ」

昂樹は電気を消しベットに入る

4話 奇襲

次の日

ベッドから体を起こし服を着替えて玄関へと向かう

「よし、走りに行くか」

これは前世からの昂樹の日課である

朝5時

そして1時間ほどで15キロほど走り別荘に戻る

「風呂入るか」

服を着替えて朝風呂にはいる

今回は昨日のようなことはこれといってなんのアクシデントもなかった。

風呂から出て服を着て脱衣所を出ると弘一さんがリビングにいた

「昂樹くんか随分と早起きだね」

「いつもの日課でして」

「そうか」

弘一さんはこっちを見ていたがすぐに別の方向を向いてしま
う

そして時刻は8時となり全員で朝ごはんを食べた

そして何事もなく11時ぐらいになる

昂樹は香澄と泉美に勉強を教えていた。弘一さんと智一さん、孝次郎さんは二階で仕事をしている。

すると突然エキドナが話しかけてくる

「(なにか来る...)」

「ああ、エキドナ感じたか?」

昂樹はすでに察知していた、ソ連側から10隻。こっちに向かってきている

「香澄、泉美。今外で何かを感じた、恐らく敵だと思う、だから俺は少し外に出る。だから香澄はこの紙を弘一さんのところに持って行って

くれ」

昂樹は懐から手紙を出す

これはもちろんエキドナが一瞬でこの状況を香澄たちを焦らせることのないように、作成した手紙だ

香澄は手紙を受け取るとすぐに部屋を出ていく

「泉美、真由美先輩はどこにいるかわかる?」

「お姉ちゃんは多分西側の海岸沿いにいると思うけど、昂樹さんまさか行くの?お父さんにまかせておけば大丈夫だよ」

「いや、それは出来ない」

昂樹は泉美にそう言うとそのまま立ち上がり廊下にてで、玄関から外に出る

「エキドナ、今の状況を見るぞ」

「ああ」

昂樹はエキドナの能力（暴食の神能）を使い背中にドラゴンの翼を生やす、そして飛び上がる

一瞬にして上空にきた昂樹は島全体を見下ろす

「西側に6隻、東側に2隻、南側に2隻か...」

すると昂樹の身体から黒いモヤが出てきて、それが人の形に変わる
「吹雪、毀慧。東、南を壊滅させてこい。容赦はいらない」

2つの黒い人物は深々と頭を下げ、飛び去っていく

それより少し前のこと

真由美は沿岸を歩いてた

「久しぶりに来たけど相変わらず綺麗ね」

太陽がさし、海がそれを反射し絶景を作り出していた
だが、その先から何かが飛んで来るのが見えた

「何かしら?」

そう思っていると、一瞬で真由美の目の前に現れる

「おうおう、なんだよいきなり見つかったじゃねえかよ」

「うるさい、静かにしろ、どうせここで全員殺すんだ変わらない」

顔は隠し、服は魔法師のような特殊な服を着ている

「(何、この人達)」

その瞬間、一人の男が刀を抜く

「ん、まあとりあえずあいつを殺すか」

真由美がその言葉を聞いて構えようと動いた瞬間

その男はすでに目の前にいた

「え・・・」

声を出す前に真由美は左肩から右腰にかけて斬られる

「っ・・・」

痛みで目の前がくらくらする。足元もおぼつかない

そのまま真由美は近くの木により掛かる

真由美の口から血が溢れてくる

「つか、こいつかなり美人じゃね？隊長さんよお、こいつ連れて帰ってもいいか？」

真由美を斬った男は振り向き、隊長らしい色の違う服を着た男に話しかける

「だめだ、上からの命令は全員殺すことだ」

「ちえっ！まあ。いっつかそれじゃあ」

男は真由美に近づき、刀を構える

その瞬間上から黒色の槍が飛んできて地面に刺さる

「うおっ、何だこれ」

男は一步下がる

すると顔は見えないが上空から黒い影が降りてくる

その男はゆっくりと降り、地面に足をつく

「お前ら、何してる？」

それは昂樹だった。

「あ？なんだお前？」

すると昂樹の後ろにエキドナが顕現すると、すぐに真由美の方に行く

「ソ連軍か？何しに来た」

それを聞き、隊長が感心したように口を開く

「ほお、我々が誰か気づいたのか、なかなかのものだな」

「お褒めに預かり光栄ですよ。(エキドナ、真由美先輩の傷はどうだ?)」

昂樹は会話をしながらエキドナに話しかける

「かなり深い、多分ボクの回復魔法で傷口は塞ぎきれると思う」

「(そうか、わかった)、だけど、ソ連軍の方々。」

昂樹はその瞬間巨大な殺気を放つ

「真由美先輩を傷つけたってことは、死ぬ覚悟はできてるんだろうな?」

「ハハハッ!こいつはおもしれえ!女の前だからってカツコつけてるぜ!」

真由美先輩を斬った男がそれをあざ笑う

「隊長さんよ、こいつ殺していいよな?いいよな!」

「かまわん、好きにしろ」

隊長が許可した瞬間、男は一瞬で昂樹の目の前まで移動し、刀を振る下ろす

が、それよりも先に昂樹が動く

「おせえよ、雑魚が」

刀が届くより前に、昂樹の蹴りが上から振り下ろされ、直撃する

男はそのまま地面に叩きつけられる

「がはっ…」

「ふうっ… 来いよ。全員殺す」

昂樹は他の7人を見る

その頃東側では西側と同じく、魔法師が3人到着していた

「よし、行くぞ」

船から降りて動こうとした矢先目の前に黒い影(毀慧)が現れた

「…」

「なんだ、あれ。人?」

「わからない、敵なのか?」

「お前ら、どつちにしろ全員殺せと言われてる構うな」

隊長はそういいCADを構える

3人は魔法構築をし、同時に魔法を放つ

「……」

だが、放たれた魔法は毀慧に触れる瞬間、白い粒子になって消える
「なっ…… どうなってる」

3人は驚きながらも再度魔法はを放つ。しかし、全て消滅してしま
う

「この影、魔法を無効化しているのか。だが物理攻撃はどうだ！」

そう言い一人の隊員が剣を取り出す

「はああっ！」

男は毀慧に斬りかかる

だが、毀慧は避ける動作もなく斬られる

「やっぱり物理耐性はなかったようだ……」

そういった男だったが、不意に武器が軽くなった気がして見る

剣は毀慧に触れた部分のみが綺麗に消えていた

「なっ……」

驚く男を気にせず毀慧はゆっくりと動き、男の心臓辺りに触れる

その瞬間男の体が一瞬にして粒子になり消滅する

「な、なにが起こった！」

隊長も、もうひとりの隊員も驚きを隠せない

すると毀慧は破壊の権能を操作し、紫黒いナイフを2本作り出す

そのまま、驚きと恐怖で動けない2人の眉間にナイフを投げる

「がっ……」

すると刺さった瞬間、2人は粒子なり消える

「……」

毀慧は前に歩き戦艦を見る

それを確認するとゆっくりと腕をあげ、戦艦の方に手開き向ける

そして、戦艦を握りつぶすように手を握る

「バーストチェイン」

毀慧は小さくそう言い放つと

同時に遠く離れた戦艦に海から現れた黒い鎖が巻き付き、戦艦の全てを跡形もなく消滅させる

その頃南側の沿岸部では吹雪が到着していた

「こいつは… 和服を着ている?」

吹雪は毀慧とは違い、少しだけ姿が頭になっている

白い和服と蒼い目、鬼のような角が生えており、刀を持っている

吹雪が刀に手を置き柄に手が振れた瞬間一人の隊員の首が宙を舞う

「は…?」

その場の全員がその状況がつかめない

だが一人の隊員が声を出す

「なにをし… た」

次の瞬間にはその隊員の首はなく、首のない胴体は地面に膝をつき倒れる

「ふう、我が主は人使いが荒い」

吹雪はぼそつと声を出す

そして鞘から刀を抜き、ゆつくりと横に一振りする

次の瞬間隊長の身体が半分になる。同時に遠くにある戦艦も半分に割れ、すぐに細かな斬撃が発生し、粉々に斬り刻む

吹雪は刀を鞘に入れる

「神里流・氷風散り桜」

消滅を確認するとそのまま西の方に飛び去っていく

エキドナは真由美に見えるように姿を現す

「エキドナ…さん…」

真由美は小さな声で話す

「真由美ボクがわかるかい?返事は手を握るだけでいい」

真由美はエキドナの手を弱々しく握る

「よし、ボクが今から回復魔法をかけるから」

「ファーストリホイミ」

エキドナは真由美の胸の辺りに手を乗せ唱えるすると真由美の下に緑色の魔法陣が描かれ、傷を癒していく

「っ…（思った以上に傷が深い。そしてボクはこの世界の干渉能力が低い。だから回復が遅い… なんとか、昂樹が来るまで持ちこたえないと）」

「はあはあ」

エキドナの息が荒くなる

「なんだ…これ。魔力が奪われる…」

傷が全く再生しないにも関わらず魔力だけが余計に吸われていく
「大丈夫だ、まだ体力はある。今は真由美を生かすことを最優先に考えよう。魔力は昂樹から借りればいい」

そのころ昂樹は回復するエキドナの前にいた

「世界で最も信頼する真由美先輩に手を出しておいて、お前ら…生きて帰れると思うなよ…」

昂樹の目が赤く染まる

その瞬間周りに異常なまでの殺気が離れる

「な、なんて殺気…」

その殺気に隊長を込め7人が恐怖する

目の前にいたのは人じゃない、「悪魔」だった

一人の隊員と昂樹の眼が合う

その瞬間その隊員が急に叫びだす

「あああああっ!!!」

そいつは夢中に地面に頭をぶつけている
血が出ても止まらない

「お、おい。やめろー」

その光景を見て他の隊員が押さえる

「その程度か…」

「うわああ！」

それを見た隊長はすぐに逃げ始め、飛びながら戦艦に戻っていく
「めんどくさ……」

昂樹は残った他の隊員の身体に目を合わせる

「天照」

すると残りの隊員全員の身体に黒い炎が現れ全身に広がっていく

「ギャアアア」

「熱い熱い!!」

次々に悲鳴が上がっていく

「さよなら。「加具土命」

そう唱えると天照は形を変え隊員を串刺しにし、それが更に枝分かれし全身から飛び出す

周りには血が一面に吹き出し、血溜まりを作る

「さあ、隊長さん……次はお前の番だ」

昂樹は遠くに見える隊長を睨む

「七聖魔装」

すると昂樹の背中に7本の槍が現れる。それを2本もつと黒い弓と黒炎の矢に変形させる。そして作り出した弓を引き標準を合わせる

「消えろ……」

最大まで弓を引き絞り炎の矢を放つ

矢は風の影響をもろともせず一直線に向かっていく

「馬鹿な、この距離を一瞬で……がはっ……」

炎の矢は隊長の心臓に突き刺さる

飛行魔力を失った隊長はそのまま落下していき海に落ちる

その瞬間、海の中で大爆発が起こる

巨大な地ならしと、水が大量に飛散る

その威力は戦略級魔法には及ばないが準戦略級魔法になりうる威力だった。

昂樹は隊長の消滅を確認すると弓の形を戻し、すぐに真由美先輩に

駆け寄る

「真由美先輩！エキドナ！」

昂樹がエキドナの横につく

「ごめん…なんとか踏ん張ったよ…」

エキドナは倒れるが、昂樹はエキドナを支える

「よくやったエキドナ。休んでくれ…」（おかしい、回復だけでエキドナがこんなに魔力を消費するなんて）」

そう思いながらも昂樹は回復魔法を展開する

「エリアハイヒール」

昂樹が唱えると緑色の光とともに再生が始まる

「戻ったよ。ボクもアシストする」

エキドナの声が頭の中に響く

「戻ったか、助かる」

「まかせて」

だがいくら時間をかけても回復が進むことはなく、魔力だけが余計に減っていく

「再生が進まない」

「ありえない、回復できないなんて」

すると昂樹が最初に蹴った構成員が口を開く

「それは再生できないよ…それは「聖痕」だよ」

その言葉に昂樹とエキドナが反応する

「聖痕だと…」

「ありえない、聖痕はボクたちの世界の言葉だよ」

聖痕とは聖剣2本もしくは魔剣2本が聖痕をつけられる能力を持つことで作れる傷のことである。その傷はどんな回復魔法でも再生することなく、「永遠の傷」ともいわれている。唯一回復できるのは、魔王が持つ不死鳥の神能、勇者が持つ勇者の神能、アニラスの持つ絶対再生を付与した回復魔法のみである。それ以外の聖痕の再生は魔王も勇者も研究したが存在しなかった。

「ハハハは、残念だったな」

隊員は昂樹たちをあざ笑う

「… 黙れ」

昂樹は七聖魔装で作り出したナイフを飛ばす

そのナイフは構成員の額を貫く

「昂樹…」

真由美先輩が目を開け小さい声で昂樹の名前を言う

「真由美先輩… ここに不死鳥の神能があと一個あれば… (不死鳥の神能は前世でしかコピーできない。この世界での増殖は不可能…)」

「昂樹手を止めるな！」

「ここにアニラスがいれば…」

昂樹は目をつぶる

するとある場面が脳裏をよぎる

魔王城の廊下

「そうだ、アニラス不死鳥の神能はどうだ？」

魔王は前を歩くアニラスに話しかける

「あ、ルイ！んー…私にはわからないかな、慈光の神能で十分」

アニラスはほほえみながら言う

「そうか… わかった」

「この不死鳥の神能は私とは別の大切な人のために取っておいて」

アニラスはそう言い手を出す

「そうするよ」

「いや！あのとときの不死鳥の神能が残っていれば」

昂樹は思い出した

「あのとときの不死鳥の神能？」

「アニラスを助けた時あるだろ？その時、不死鳥の神能をコピーして一時的に渡した、けどアニラスは慈光の神能を持っていたから必要なかった、だから今もしかしたら俺の中にあるかも」

「そうかあのとときか！」

エキドナはすぐに確認する

「昂樹。今確認したけど持ってる！行けるよ！」

「真由美お前は絶対助けるだから、譲渡まで耐えてくれ！」

「(初めて呼び捨て… してくれた…)」

真由美の目から涙が流れる

昂樹は真由美の胸に手をかざす

「不死鳥の神能の譲渡を開始するよ」

「頼む」

周りが炎に包まれる

「(炎? でも不思議熱くはない、優しくて温かい)」

優しい炎に包まれる中、真由美の意識は途切れる

真由美は目を覚まし体を起こす

「あれ… ここは…」

真由美は周りを見る、そしてあることに気づく

「傷どころか服も治ってる」

自分の体に触れる

「真由美先輩! 体の調子はどうですか? どこか痛いとか」

昂樹は心配そうに見つめる

「大丈夫よ、今までにないぐらい好調かも」

「良かった、不死鳥の神能がなんとか適応したみたい。けど真由美先輩もしかしたら俺の不死鳥の神能を取り込んだから、半人間半魔族になっちゃったかも。ごめんなさい」

昂樹は頭を下げる

「謝らないで。本来死に至る傷を治したんだものそれぐらいの副作用は承知してるわ。それよりもこれから昂樹と一緒にいられるなら何でもいいわ」

するとエキドナが昂樹と真由美に声をかける

「いいシーンで水を差すようでわるいけど、真由美は人間のままだよ。」

「え? なんぞ?」

昂樹はエキドナに疑問を聞く

「ボクも詳しくはわからないけど、昂樹が一度アニラスに譲渡したこ

とで、アニラスの体の中で不死鳥の神能と慈光の神能が部分融合して、それを昂樹が回収したから真由美に渡した不死鳥の神能は人間のまま適合できたんだと思う。」

「アニラスさんに感謝しないと」

「そうですね」

「そくいえば昂樹くん私のこと呼び捨てで呼んだでしょ」

小悪魔みたいになる真由美先輩

「な、な、なんのことですか」

「聞いてたよー」

「恥ずかしい…」

真由美は昂樹の胸に飛び込む

「ちよつ、真由美先輩?」

真由美先輩は泣きながら抱きつく

「私、何度も何度もそのまま死んじゃうかもって考えて。もう昂樹に会えないのかなって。でも、エキドナさんが必死に回復魔法をかけてくれて、昂樹が私のために戦ってくれて。嬉しかった。ありがとう」
「泣かないでください、俺は決めているんです。真由美先輩を絶対を守るって。真由美先輩に笑顔でいてほしいんです」

昂樹は優しく微笑みかける

「ありがとう昂樹くん」

真由美は昂樹に微笑む

「帰りますか」

「そうね」

その時遠くから何かが弾ける音がした

この音とともに戦艦から大量のミサイルが飛んでくる

「まだやる気なのか。真由美先輩俺に寄って」

昂樹は真由美先輩の肩を掴み自分の方へ寄せる

「っ…／／／（ち、近い）」

昂樹の目が永遠の万華鏡写輪眼へと変わる

「須佐能呼」

その瞬間昂樹と、真由美先輩の周りを囲うように黒い炎が現れ武士のような形をした像ができる

そして、ミサイルが衝突し大爆発を起こす

辺りに煙が立ち込める

煙が消える

その煙の中から現れたのは無傷のままの須佐能呼だった。

昂樹は須佐能呼を動かす。須佐能呼の左手から黒色の弓が出現し右手は黒い矢を持っている

須佐能呼は弓をゆっくりと弾き絞る

「インドラの矢」

その瞬間須佐能呼は矢を飛ばす

その矢は真っ直ぐに戦艦の方へ飛び戦艦のちようど真ん中に行った瞬間に

大爆発を起こし戦艦もろともすべてを消滅させる

一瞬で海は一面枯れ果て、地面には巨大な穴を、辺りには雷のようなものが走っている

その威力は戦略級魔法と同等いや、それ以上だった

「うそ…なんて威力なの？これじゃあ昂樹くんは戦略級魔法師並みの強さ…」

「俺は前世では魔王ですよ」

「それもそうね」

「今度こそ帰りましようか」

「そうね」

5話 弘一の企み

七草家別荘

「戻ったよ」

昂樹と真由美先輩は無事に七草家につく。すると香澄と泉美が走ってくる

「昂樹さん！お姉ちゃん大丈夫だった？さっき巨大な武士みたいなやつが、すごい魔法を放ってきたから心配で」

「ええ、大丈夫。昂樹くんのおかげで無事よ」

「よかった」

「よく戻ってきた」

そこには弘一さんも姿があつた

「弘一さん、なんとかかでした」

「戻ってすぐに悪いが昂樹くん私の部屋に来てもらえるかい？」

「わかりましたすぐにお伺いします、真由美先輩はゆっくりしてください」

「わかったわ」

昂樹は弘一の後をついて行く。あの場に弘一がいたのは知っていた。すべて見られていることも承知だ

部屋について座る

「まずは、真由美を守ってくれて感謝する。それとミサイルから私も守ってもらったな」

「いえいえ、気づけて良かったです」

弘一は真剣な顔をして話し始める

「昂樹くんあの魔法はなんだい？」

「話さないとダメですか？」

「あの魔法は戦略級魔法に該当する威力の魔法だ、この国でも一握りの人間にしか使えない魔法、七草家当主として、十師族としても見逃すことはできない」

「やっぱりですか…」

昂樹は下を向く、真由美先輩を助けるためといえ、真由美先輩と摩

利先輩以外にこのことを知られるのはあまり良くはない

昂樹が返答に困っていると弘一さんが先に口を開く

「だが、私自身君に助けられた、魔法がどういうものなのか聞ければ、秘密にすることにしよう。他の十師族会議でも仮面をつけた未確認の戦略級魔法師に助けられたと言っておく。どうだね？」

「わかりました。では、話します。あの魔法は須佐能呼、インドラの矢と呼ばれる魔法です。神里家に伝わる秘伝や、奥義に分類される魔法です。」

そう言って昂樹は写輪眼を見せる

「こ、これはすごいな。目を合わせるだけでも寒気を感じるよ」

「そして須佐能呼はこれです。弘一さんをミサイルから守った魔法です」

昂樹は右腕に須佐能呼の黒炎を纏う

「触ってみますか？」

「いいのか？」

「はい、触れても大丈夫なように設定したので」

「わかった」

弘一は昂樹に近づき須佐能呼に触れる

「不思議な感触だな」

「まあ、一応魔法に触れていることと同じなので、不思議なのかもしれないですね」

「して、触れてもいい設定にしたと言ったがどのような能力をなくしたのだ？」

「天照という能力です、この炎に触れると対象が燃え尽きるまで燃え続け、灰になります」

「それは恐ろしいな、いや、すまない秘伝に分類される能力を教えるもらって」

「いいえ、約束さえ守っていただければ大丈夫です」

「しっかり守ると約束しよう」

「では、真由美先輩のところへ行きますね」

「ああすまなかつた。真由美を頼むぞ」

「はい」

昂樹は立ち上がり部屋を後にする

昂樹が部屋を出てから

弘一は先程彼の言っていた事を思い返していた。

彼の魔法である須佐能呼、インドラの矢、天照。それは、どれも戦略級魔法に該当してもおかしくない魔法だ。須佐能呼は十文字家の魔法である、絶対的な防御力の魔法と同等の硬さ、インドラの矢は戦略級魔法級の威力

天照は触れた相手を燃やし尽くす初見殺しの魔法だ。

「この世界にここまでこの化け物がいたとは」

彼の存在は、十師族のパワーバランスを崩壊しかねない。

幸い、娘達は彼と仲が良い。特に、真由美は彼に好意を抱いているだろう。

「彼を引き込めば七草はさらに力を増し、四葉をも超える力を手にする事が出来る。だからこそ昂樹くんとこの友好関係は絶対条件だ」

昂樹は部屋をでて自分の部屋の前の壁に寄りかかる

意識を集中させエキドナのいる空間に入る

そして、エキドナのいるパラソルに向かい座る

「やっぱり来たね」

「そりゃあのことについてだよ。なぜこの世界に聖痕というものがあるかだろ?」

昂樹は置かれている紅茶をのみながら語りかける

「ああ、それはボクも疑問に思っていたよ」

「聖痕は俺たち前世の言葉だ、なら考えられるのは誰かが俺たちと同じように転生してこの世界に来たことだ」

「その可能性が一番高いね、現状この世界の技術力では聖痕は実現できな」

「なら誰なのかって話だ」

「うーん、まずはボクが考えられる線を全て言うから、昂樹はそれについて考えてくれ。まず勇者の線から考えていこうか」

「まず勇者の線はないな。なぜなら俺と一緒に聖痕を根絶させようとしたから。そして彼自身聖痕は嫌いだということ」

「そうだね。なら次は吹雪、毀慧、楓の線」

昂樹は首を振る

「次はアニラスの線」

「これもない」

「前世の魔族もしくは、人間の線」

「これもないね。俺と勇者が世界を回って聖痕の魔剣、聖剣を封印したから」

「ならその封印が解かれたか」

「ないね、勇者、俺、エキドナで作った封印が解かれるはずがない」

「なら、前世で昂樹たちが魔剣、聖剣を封印する前に死んだ人物」

「うん。この線が一番高い」

「だが、範囲が大きすぎる。もっと狭めない」と

「いや、今聖痕という情報がない中でむやみに軍との関わりを持つのは良くないと俺は思う」

「だね、」

「昂樹くん？ 昂樹くん？」

目を開けると真由美先輩がいた

「ん？ あ、すいません少し考え事してました」

「そう？ それで、どうしたの？」

昂樹はあることで自分から真由美先輩を呼び出したことを思い出した

「そうでした、一応不死鳥の神能が完全に適合したか確認しますね」

「わかったわ」

「では、真由美先輩の部屋に行きますか」

「ええ」

2人は真由美の部屋に向かい合い座る

「では確認しますね」

するとエキドナが具現化する

「昂樹、確認するのはいいけど、今回は遺伝子まで確認するから、直接肌に触れてないとダメだよ」

「マジかよ、えつと…」

「服脱ごうか？」

「そ、それは」

「ふふふ、かわいい」

「からかわないでください」

エキドナが呆れながら2人に話しかける

「決してボクは服を脱げとは言っていないぞ」

「あ、そっか。では真由美先輩おでこを合わせてください」

「わかったわ」

2人はおでこを合わせる

「(近いよ…さつきからどうしたの私)」

「(なんか、いい匂いするんだけど)」

「もう大丈夫だよ」

「了解」

「真由美の細胞とか見たけどしつかり適合してたよ、もう暴走の心配はないね」

「よかった」

高校編

6話 国立魔法大学付属第一高校

そしてこの一件から約2年後

昂樹は無事に国立魔法大学附属第一高校に2科生として入学した
実技は相変わらず魔法が使えないので最下位だったが、ペーパーテ
ストでは2位という結果を叩き出した。噂では七草弘一が少しばか
り助けたとも言われてるらしい

そして入学式当日

「ちよつと早く来すぎたかな」

昂樹は中庭を歩きながらそんな言葉を吐く

念のためを思っただけで早めに出発したがあまりにも早くついてし
まった

「暇だしそこら辺のベンチに座るか」

昂樹は少し歩いてから見つけたベンチに座る
すると後ろから声が聞こえる

「ねえあの子ウィードじゃない？」

「ほんとだ、補欠の分際でなんで堂々としていられるのかしら」

そうこの高校には1科生、2科生と分かれている。1科生はブル
ム、2科生はウィードと言われている

特にブルームからウィードの扱いはひどいものだ。
そんなことを考えていると、突然隣に誰かが座る

昂樹は気を使い少しばかり横にずれる

隣に座った男は、何故かこちらをずっと見ている。

エキドナで周囲を感知しているからわかる

「あのー、ずっとこっちを見るのはやめてもらえますか？」

昂樹は隣を見て言う

「すまないそんなつもりはなかったんだ」

男は動揺もせずゆっくりとした口調で離す

昂樹は視線をずらし肩の模様をみた

「(この人肩のところに花の模様がない2科生か)」

「いやいや、大丈夫。あ、俺は神里昂樹。2科生だ、よろしくね」

「俺は司波達也。同じ2科生だ、よろしく頼むよ」

「同じ2科生として話したいことは山々だが、ちよつと行くところがあるんでな、ここら辺で移動するよ。それじゃあね達也！」

「ああ」

昂樹はベンチを立ち上がり移動する

達也は昂樹の後ろ姿を見ながら

「俺の目を見抜いたか… 名前は確か昂樹か… 何者なんだ」

歩く昂樹も似たようなことを考えていた

「達也か、仲良くできそうだな」

そうこれが後に灼熱のハロウィンと呼ばれる戦いに深く関わる2人の出会いだった

入学式が行われる巨大なホールにて昂樹は普通に席に座っていた
だが、突然隣から大声で話しかけられる

「なんでここに2科生が座っている！」

となりの1科生が声を上げる

そう2科生と、1科生、席の指定はないが前列が1科生後列が2科生と明らかに分かれている状況の中、昂樹はそれを気にしていなかった

「はあ、別に席の指定はないし自由だろ」

「はあ？ 周りを良く見ろよ、ブルームとウィードで分かれているだろ
！」

「でも、そんなことをはこの校則にもきまってるだろ？」

それを遠くから達也とエリカ、美月は見ていた

「なにあの子すごいわね」

エリカは面白そうに見ている
「そうですね」

美月は恐ろしそうに見ている
「(昂樹?何をやっているんだ)」

すると昂樹は先に折れる
「はあ、まあいいや、座っていいよ。そこまで大事にしたくないからね」

昂樹は席を立ち上がり後ろ側に歩いてくる。たまたま達也の前を通る

「あれ?達也?と、どちら様?」

「私千葉エリカ。よろしくね」

明るい栗色のミディアムショートカットの髪で、十人が十人とも認めるだろう陽性の美少女

「柴田美月です。よろしくおねがいます。」

美月は黒髪ショートヘアで、メガネを掛けている。いかにもおっとり系の美少女だと思う

「よろしく」

「昂樹、そろそろ式が始まるぞ。座ったほうが良い」

「おそっか、柴田さん隣失礼」

「あ、はい。どうぞ」

式が終わり4人で移動中

「(確か司波深雪(みゆき)だったか、新入生総代なのになかなか肝が冷えたな。)」

昂樹は司波さんの話しを思い出していた

内容には「皆等しく」・「一丸となつて」などなどわりと際どいフレーズが盛り込まれていた。普通に考えれば、差別意識の高い一科生からすれば喧嘩を売ってるも同然だ。だがそれはなかった。なぜなら答辞をしていた彼女に誰もが見惚れていたからだ。それは男だけでなく、同性の女も含めて。

確かに司波深雪は可憐な美貌の持ち主だった。見惚れるのは当然だと納得する。

前世でアニラスや吹雪たちを見た昂樹からすれば、あんまり感じるものはなかった。

比べてはいけませんが、アニラスに比べればまあまあという感じだ。とは言え、司波深雪は人間でありながらも美貌は逆に違和感を覚えてしまう。

まるで完全に調整されたかのような顔立ち。もしかして遺伝子操作によって生み出された子だったりして……。そんな感じのことを一人で考えていた。

それとは別に気になる事もあった。あの子から感じるオーラは、やけに達也と似ていた。それどころか達也は彼女のオーラによって覆われていたように見えた。

本来この世界の原理では人間が持つオーラは全く異なっており、例え親族でも完全に同じではない。

だが達也が覆っているオーラは、司波深雪のオーラと全く酷似している。恐らく二人は双子の兄妹で、何かしらの封印、もしくは誓約を掛けているんだと思う。そうでない限りオーラが全く一緒になるわけがない

そのあと昂樹はIDカードを受け取りI―F組に向かう

教室に入ると見慣れた顔があった

達也に、エリカ、美月だった

「よかった知り合いがいる」

そして、達也の隣には新入生総代のかの美少女がいた

「達也、同じクラスだな。よろしく」

「ああよろしくな」

美少女はそんなやり取りを不思議そうに見ている

「おっと、これは失礼紹介が遅れました。I―F神里昂樹です。できれば苗字じゃなくて昂樹って呼んでほしいな。」

それを聞いてすぐに話し始める

「司波深雪です。よろしくおねがいします。私のことも深雪とお呼び

く

「ださい。」

「深雪よろしくね」

そしてオリエンテーションを終えて

放課後、深雪が達也と一緒に帰ろうとするところを、一科生が難癖を付けていた。昂樹は別にやりたいことがあったから別行動だったが、今は遠目からそれを見ている。

売り言葉に買い言葉状態だったが、痺れを切らしたと思われる一科生の男子生徒がCADと思われる小型拳銃を取り出して照準を定めている。対してエリカがいつの間にか接近し、警棒らしきCADを振るって男子生徒の小型拳銃型CADを弾き飛ばした。

「エリカ、なかなか速いな」

昂樹はこの瞬間でこの中に入る

一科生が二科生に負けたと言う事実を認めたくないのか、他の一科生の男子生徒達も応戦しようとCADを通じて魔法の発動準備に移った。加えて一科生の女子生徒がどう言うつもりか、同じクラスメイトに向かって魔法を放とうとしている。

「これはまずいな」

昂樹が止めようとした瞬間

「止めなさい！ 自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、犯罪行為ですよー！」

「風紀委員長の渡辺摩利だ。事情を聞きます。全員付いて来なさい！」

真由美先輩と摩利先輩はCADを構え向かってくる

するとすぐに達也が前に出て話し始める

「すみません、悪ふざけが過ぎました」

説得を試みる

「悪ふざけ？」

達也の巧みな会話で二人を納得させようとするがこんなことで二人は引き下がらない

「達也はさっきの魔法がただの閃光魔法だつて言うのがわかってい
るのか、発動前の魔法式がわかるっぽいな」

その事に真由美先輩と摩利先輩も気づいているようだ

「まあここは俺が行くか」

昂樹はそんなことを考えながら前にでる

「失礼します。生徒会長。1—F組神里昂樹です。」

「君は—」

摩利先輩は昂樹の登場にかなり驚いている

一方の真由美先輩はニコニコしている

「(高校合格したの教えなかったからか。あの笑顔怖い)」

「今日は入学初日ということで収めませんか。魔法を放とうとした
彼女も誰かを傷つけようとして発動させたわけではないですから。」

それを聞いて真由美先輩が口を開く

「それもそうね、今回は多目に見ましよう」

真由美先輩は摩利のCADを抑える

「まあ、真由美がそう言うなら今回は目をつぶろう。だが次はないと
思え。」

そう言うと2人はこの場を去っていく

他の1科生もそれに合わせて去っていく

「すまない、助かった」

達也は昂樹に近づき少し頭を下げる

「大丈夫。」

先程魔法で止めようとした女性と、その隣りにいた女性が昂樹に話
しかけてくる

「先程は助けて頂いてありがとうございます。私は光井ほのかって
言います」

「北山雫です」

「俺は神里昂樹です」

するとほのかは達也の方を向く

「あ、あの達也さん一緒に帰ってくれますか?」

ほのかは顔を真っ赤にしながら大きな声が出てしまった

帰り道

「……じゃあ深雪さんのアシスタンスを調整しているのは達也さんなんですか？」

「ええ、お兄様に調整をおまかせするのが1番安心しますから」
達也を挟んでほのかと深雪が話していた。

「少しアレンジしているだけなんだ、深雪は処理能力が高いからCADのメンテに手間がかからない」

「それだってOSを理解しないとイケないでしょ？十分すごいでしょ！」

すると達也は突然話を昂樹に降ってくる

「そういえば、昂樹はどんなCADを使うんだ？」

いきなり振られたので少し動揺したがすぐに反応しCADを取り出す

「ああ、おれはこれだよ。星装頭符(せいそうげんぷ)っていうCAD」
達也はそれを覗き込むように見る

「見たことないCADはの形状だな、紙に近い素材なのか……」

「作ったよ自分で」

「昂樹の自作?!」

エリカが突然声を上げる

「うん、そうだけど」

「なるほど、してどのくらいの魔法を使えるのか教えてもらえるか？」

「900ぐらいかな」

昂樹のその言葉に一同は哑然とする

「昂樹、私から質問よろしいですか？」

「深雪? いいよ」

「900も魔法があって処理が追いつきますか？」

深雪の質問に昂樹以外の人はうなづく

「えっとね、使い分けてるから大丈夫、あと現代魔法なくて古式魔法近いから少し定義が違うからっていうのもある」

「昂樹、今日家に来てほしい」

すると話を割るように達也が昂樹を家に誘う

「えっ？どったの達也」

「少しだけでいい」

「まあいいけど」

家に行く意図がわからないが、今日についていくことにした

7話 トーラスシルバー

そして、みんなと解散し達也の家に向かうため歩き出す
「ここが達也の家かでないな」

「では、どうぞ入ってください」

深雪が玄関の前で昂樹を向かい入れる

「お邪魔します」

玄関で靴を脱いだ昂樹は達也と深雪についていく

そして、ダイニングのテーブルに案内され座る

少し雑談した後、突然真剣な顔をして達也が話し始める

「トーラスシルバーという名を聞いたことはあるか？」

「ああもちろん知っている」

「それが俺だ」

その言葉に驚き先に声をあげたのは深雪だった

「お兄様！そのことは…」

だがそれを止める達也

「いいんだ深雪」

深雪は仕方がなく引き下がる

「しかし…わかりました」

昂樹はこのことについて少し考えていた

「（秘密の暴露。相手を信頼させるための一種の洗脳方法。このことは達也は他人に言うてほしくないらしい）」

「それで俺に何を話してほしい？」

「驚かないのか」

「驚いたけど、なんか納得というかね。」

「それでトーラスシルバー様が

なんのようですかね？」

「昂樹のCADを見せてほしい」

達也は真剣な顔で要求してくる

「んーまあいよいよ。ただその代わりにこのCADについては秘密に

してほしい、もちろん達也がトールスシルバーってことは秘密にする」

「(いや達也、この交換割に合わなくね)」

と考えながら話す

「ああこちらも秘密を言って広める心配はいらない」

「そうと決まれば訓練場にレッツゴー」

昂樹は席を立ち上がる

訓練場に向かう3人

「よし俺のCADだけど、陰陽術えお参考につっている。腕や足、武器などに装着、変換等ができる。今日見せるのは腕に装備する最上位12個のうち1つだよ」

「わかった」

「お願いします」

達也と深雪は少し離れる

昂樹はCADを持ち唱える

「星装顕符・白蓮虎咆(びやくれんごほう)」

するとCADが消え昂樹の右腕が白くなり、青い巨爪が現れる

「こんなもん。どお?」

「なるほど、ではこれを攻撃してみてください」

達也がタブレットを操作すると下から人形が出てくる

「了解。虎斬・軻遇突智(かぐつち)」

昂樹が少し爪を動かすと斬撃が発生し正確に人形を切り裂いた

「ありがとう、参考になったよ」

「おう!あと、達也。このCAD形だけは作れるけど使えないと思うよ」

すると達也の隣りにいた深雪が話しかけてくる

「それはなぜですか?」

「このCADはね達也とか、深雪みたいな魔法演算領域を持つ人は無条件で使えなくなるの」

「その言い方だと、昂樹は魔法演算領域を持たないということか?」

(やべ、これあんまり話さないようにしないと行けないんだった、でも

達也もトールラス・シルバーのこと言ってくれたしいいか)

「まあ、基本秘密だけど、達也には話すか。俺はね魔法演算領域を持たない魔法師！だから俺専用のCADなのさ。試しに深雪使ってみる？」

「いいのですか？」

深雪は心配そうではあるがCADを受け取る

「使えないと言っても爆発したりはしないから安心して。」

深雪は昂樹と同じ呪文を唱える

「星装顕符・白蓮虎咆」

しかし何もおこらない

「まあこんな感じになります」

「なるほど、こうなるのか。見せてもらい感謝する」

深雪は昂樹に近づきCADを渡す

「昂樹、CADをお返ししますね」

「お、ありがとう、じゃあそろそろ帰るね」

「長く引き止めてしまい悪かったな」

「全然大丈夫、また明日ね」

「玄関までお送りします」

昂樹と深雪は訓練場を出て玄関につくと深雪が笑顔で見送ってくれた

「いいのか？話してしまつて」

一人で昂樹が歩いているとエキドナが話しかけてくる

「ん？いいさ達也は信頼しているからね」

「昂樹がそう言うなら大丈夫か。それと式神の件だが、吹雪だけだが切り離せるようになったよ」

「ついにかく楽しみだな。でも毀慧(きえ)のほうはなんでできないの？」

「それが切り離しがなかなかうまく切り離せないんだすまない」

「大丈夫〜！」

その日の夜

ベッドに入るとすぐに電話がかかってくる

「もしもし」

「もしもし、昂樹くん今大丈夫？」

電話の相手は真由美先輩だった

「はい、大丈夫ですよ」

「ならいいわ、ねえ、どうして合格したのに連絡くれなかったの？」

「(やっぱり、今日のあれは当たってたか)。真由美先輩たちにドツキ
りと思わせて」

「あらそうなの、まあいいわ。明日生徒会室にきて、摩利が待ってるわ
よ」

意外にも信じてしまった

「わかりました」

「深雪さんも呼んでいるから一緒に来てね」

「了解です」

昂樹はそう言い電話をきる

「よし、エキドナ、吹雪を呼んでくれ」

「まかせて」

エキドナが顕現し、手を前に出す。するとベッドの横に青い魔法陣
が現れる

その魔法陣から薄っすらと人の影が現れてくる

次の瞬間

「ああ、私の昂樹」

魔法陣から飛び出した吹雪は昂樹に抱きつく

「ちよつ、吹雪…うわあー！」

そのままベッドに押し倒され、昂樹の顔に吹雪の胸が押しつけられ
る

「吹雪、く、苦しい…」

「これは！ごめんなさいね」

吹雪は昂樹から少し離れる

「相変わらずだね、吹雪」

「エキドナ様、お久しぶりです」

吹雪は深々と頭を下げる

「ちよい！俺にはないの？」

「昂樹は私の弟みたいなものですから！」

再度吹雪は昂樹に抱きつく

「わあっ！それにしても久しぶりだね」

昂樹は吹雪に埋まりながら声をかける

「そうね、でもあの時はごめんなさいね。私が先に死んでしまっ

吹雪の綺麗な瞳がこちらを見る

「いや、あれは勇者パーティが強かった。楓や毀慧でさえも敵わなかったからな」

「して、アニラス様はどうなりましたか？」

「アニラスは神と戦っていた時に亡くなったよ、どう頑張っても吹雪達のように俺の中に取り込めなかった」

昂樹はゆっくりと下を向く

「それではエキドナ様でも今どこにいるかさえも掴めていないのね」

「そうなんだ。そもそもこの世界にはいないのかもしれない」

「そんな…私たちが生きていれば…」

吹雪もうつつむく

「そんなことないさ、生きていたとしても変わらなかったさたぶんねけどま、前世ではすべきことはできたさ」

「そうですか、ではこの世界では何を？」

「今度こそ、俺も守るべきものを守るかな」

「我也協力しますよ」

吹雪は純白な手を差し出す

「ああ心強いよ」

昂樹はその手を握る

8話 達也とバトル

次の日の朝

吹雪とともに九重八雲と呼ばれる人に手合わせしてもらうために九重寺に行く。

するとそこには深雪と、九重と思われる人と戦う達也がいた、

「あー深雪ーおはよう」

突然、昂樹の登場に深雪は不思議そうな顔をしている

「昂樹？どうしてここに☒」

「いや、九重先生が強いつて聞いたから来てみた」

「そうですか、して、そちらの女性はどちら様なの？」

深雪は昂樹の後ろの吹雪を見ながら昂樹に目を合わせ質問する

「そーだった。紹介が遅れた、俺の式神の吹雪だよろしく頼む」

「私は吹雪という、以後お見知り置きを」

「よろしくお願いします」

2人は挨拶を交わす

「それにしても、達也はあんなに強いのか、すごいな」

昂樹は遠目で戦う達也を見ている

「そうです、お兄様は九重先生の弟子ですから」

「なるほどね」

すると昂樹のスマホが鳴る

「すまんちよっと抜けるわ」

昂樹は階段の方に去っていく

「吹雪さん、昂樹さんとはいつからのお付き合いなのですか？」

「付き合い？私は主がうまれてからすぐに式神となったから、もう十数年前だろうね」

「そんなに長く…」

深雪がそう言おうとした瞬間、達也が吹雪の後ろへ素早く現れる。

そして手刀を、上から振り下ろす。

だが、吹雪はそれを察知し、その手刀を最も簡単に扇子で防ぐ

「何の真似だ？小童」

吹雪は氷のように冷たい殺意と共に言葉を放つ
それを深雪が止める

「お兄様待ってください、吹雪さんは敵ではありません、昂樹の式神です。」

すると達也は扇子から手を離し謝る

「すまないつい、戦いの後で敏感になってしまった」

「いいのさ、気にするな」

時を同じくして昂樹が戻ってくる

「お！達也おはよう！」

「おはよう昂樹」

「それで、達也くんこの2人はどちら様だい？」

近くにいた九重であろう人が話し始める

「九重先生、昂樹は俺のクラスメイトです」

「おークラスメイトだったか、挨拶が遅れたね僕は九重八雲だ、よろしくね」

「よろしくお願いします。」

「して、昂樹くん、今日はどうしたのかな？」

「九重先生が強い体術使いと聞いて戦ってみたいと思ひまして」

九重は頭を掻きながら昂樹のことを見る

「そうかいそうかい、でも今日は、僕の弟子達也くんに戦ってもらおうかな」

「俺ですか？」

「そうだとも、行ってきなさい！」

「昂樹それでも大丈夫か？」

「おう、全然大丈夫。(ここで達也と戦えるのか、いい経験になりそうだ)」

2人は向き合い構える

九重先生が2人の真ん中に立ち

はじまりの合図を出す

「勝負、始め！」

合図同時に達也が一気に距離を縮め正面からのパンチを繰り出す

昂樹はそのパンチを受け流し反撃する

達也も昂樹のパンチを受け流すが、受け流すと同時に昂樹の繰り出した蹴りが達也にあたり、すこし達也が怯む、しかし達也も負けずと一気に距離を詰め蹴りを入れる。

一方、深雪、吹雪 side

「すごい、お兄様の攻撃を簡単に受け流している」

昂樹と達也の戦いを見て深雪は驚きを隠せない

「私の主人が弱いわけがなろう。にしても深雪の兄もなかなかの強さだな、主人とあそこまで渡り合えるとは」

「吹雪さん、昂樹が使ってる体術は何なの？」

「主人は神里流よ、刀術、体術などさまざまな用途がある、しかも神里流には使い手に独自の属性がある」

「属性ですか？」

「そう、私なら水と氷、昂樹のもう一人の式神は破壊、そして主人は全属性使える。水属性なら受け流しに長けていて、岩属性なら防御、氷属性なら細かな攻撃と、いう感じよ」

「全属性ですか、手強いですね」

「お互いにだけけどね」

吹雪は深雪に笑いかける

「ええ、そうですね」

昂樹、達也 side

激しい攻防の末に2人は一旦距離を置く

「やるね、達也」

「そつちこそな、昂樹」

「(達也やっぱり強い、神里流も見せだし、そろそろあれを見せるか)」
「(どの動きも隙のない攻撃だった、昂樹はかなり強い)」

2人は心の中で互いを讃えあう

すると昂樹が口を開く

「達也、少し本気モード出してもいいか？」

「本気モードだと… わかった受けよう」

横から吹雪が声を上げる

「主人！まさかあれをお使いになるのですか！」

「ああ、達也は信頼してる大丈夫だ」

吹雪は不安そうに昂樹を見つめるが、すぐに普通の顔に戻る

「主人が仰るなら大丈夫でしょう」

「よし…」

昂樹は目を瞑る、そして、再び目を開く

すると昂樹の目は赤く、そして勾玉が3つ浮かび上がる

「紅い目…」

それを見た達也はあのことを思い出した。

「あれは…」

深雪も動揺を隠せない

「あれは、写輪眼という眼術の一つだ、神里家には3つの眼術がある、写輪眼、蒼眼、魔女の眼（ソルシエル・アイ）の3つだよ。」

「なるほど、昂樹はその中の写輪眼というわけですね、（魔女の目、お兄様の精霊の目と名前は似ているけれど…）」

深雪がそう考えている隙に昂樹が踏み出し一気に達也に近づく

「（速い）」

昂樹の素早い攻撃により達也の反応が少し遅れまともな一撃が入る

「ぐっ」

少し怯むが、すぐに体制を立て直し達也は反撃に移る。しかし、あらゆることか昂樹は達也の攻撃を先読みしたように動き、攻撃を躲したのだ。この動きには達也でさえ驚く

達也は再度昂樹から繰り出された攻撃をギリギリのところまで回避し距離を取る

「今のを躲すか…」

「流石に今のは驚いたさ」

2人は笑みを浮かべる

「（これは俺も少し本気を出さないと申し訳が立たないな、精霊の目を

使うか、昂樹なら第6感などと隠す必要もないだろう、昂樹も秘術を使っているようだし」

「(ん?何だこの感じ)」

するとエキドナが脳内で話してくる

「達也が何か使ったみたい、なんだろうこの感じ。とりあえずボクもヘルプに入ろうかな」

昂樹は心の中で感謝を伝える

「エキドナすまない今回は俺一人で戦ってみたい」

「そう?なんか残念」

「ごめんな」

「大丈夫。スキルの一環でしかないボクをここまで信頼してくれるのは嬉しいよ」

そして昂樹は達也に目を合わせる

「達也も本気モードかな?」

「ああ、本気で行くぞ」

2人は最大限まで気力を溜める

そして、解放

しようとすると、

「そこまで!」

2人の間に九重先生が割って入る

「うわ!」

「くっ」

九重は冷静な口調で話しはじめる

「君たち!ここ一帯を吹き飛ばすつもりかい?」

「そんな威力はありませんよ」

「いいやあるね、そうだろう昂樹君?」

「わかりません。ま、この続きはまた今度やろうな!」

「そうだな」

そこへ、深雪と吹雪が近づくと

「お疲れ様でございます主人、達也殿」

「お疲れ様です、お兄様、昂樹、服の汚れを落としますね」

深雪はCADを、操作する

すると、達也と昂樹の足元に魔法陣が現れ、2人の服を綺麗にする

「深雪ありがとう」

「おーすごいいなー！深雪サンキュー」

昂樹は制服を見ながらいう

「なんと！すごいな魔法は！」

2人は深雪を賞賛する

すると、深雪は少し照れながら俯く

「ありがとうございます」

4人は学校に行くため九重寺を後にする

学校へ向かう道中達也が質問を投げかける

「昂樹、先程の戦闘の時使っていた眼は何たんだ？」

「あーね、あれは写輪眼って言って神里家に派生する眼術の一つだよ」

「どう言う能力なんですか？」

その言葉を聞いて達也は少し怒ったように

「深雪その言い方は良くないぞ、話せないこともあるはずだ。」

深雪は咄嗟に謝り深々と頭を下げる

「申し訳ございません」

「俺からも謝らせてくれ他人の能力を聞くのは御法度だからな」

「いやいや全然大丈夫だよ、気にしないで深雪、どっちにしろ話す気で

いたし。写輪眼はね、動体視力の向上が主な能力だよ、あとは他人の

魔法などをコピーできる。ま、コピーっても簡単なやつだよ深雪みた

いにバカ難易度高いやつは無理」

「なるほど、確か昂樹の目は3つ勾玉があつたがそれは何の意味があ

るのか教えてもらうことは可能か？」

「ナイス質問！よく見てるね、勾玉の数は1から3まであつて、1が最

初、3が最終段階で、1と3じゃ動体視力強化の違い、コピーできる

魔法の難易度の違いがある！って、俺だけ話してるけど、達也もあの

目のこと教えてくれよな!!？」

「ああ、もちろん教えるが、そろそろ学校に着きそうだよ」

「ホントやー！じゃあまた今度教えてな」

「わかった」

学校につき、深雪と別れ、達也と昂樹はクラスへと向かう

9話 生徒会

深雪と別れ、教室に入るとエリカと美月が待っていた

「エリカ、美月おはよう」

「昂樹！達也くん。おはよう」

エリカは元気よく教室の真ん中から手を振る

「おはよう御座います昂樹さん、達也さん」

一通り挨拶を終え自分の席に着くと達也の前の席の男子が話しかけてくる

「俺、西城レオンハルト！よろしくなレオって呼んでくれ」

「司波達也だ、右は神里昂樹だよろしく頼む」

「よろしくなーレオ！」

「おう！で、早速今日の昼飯一緒に食うか？その女子2人も一緒に」

「私は千葉エリカよ！よろしくね」

「わ、私は柴田美月です」

エリカと美月が名乗る

「レオすまない、今日の昼は深雪と生徒会室に呼ばれてる」

「そっか、了解また今度行こうぜ」

「了解だ」

昼休み

達也は深雪と合流するために深雪のクラスへ向かう

近くに行くくと人だかりがあつた

「ねえねえ、あの深雪さんと一緒にいる男の子めっちゃかっこよくな
い？」

「うんうん超イケメンだよな」

「でも、2科生なの惜しいよね」

そんな声があちこちから聞こえる

深雪は達也に気づいたのかこつちに向かってくる

「お兄様、では行きましようか」

すると、その男がこちらを向く

「昂樹？どうしてここに☒」

「おつ、きたかー俺も生徒会室に呼ばれてるのさ！」

「そのようですよお兄様」

「3人はそのまま生徒会室に向かう」

生徒会室の前についた3人はドアをノックし名乗る

「失礼します、司波深雪です」

「はい、遠慮しないで入って入って」

3人は案内され、中央にある大きい机に座る

「今日は来てくれてありがとうね」

真由美先輩はニコツと笑いかける

「はい」

「真由美先輩、摩利先輩お久しぶりです」

昂樹は前に出て2人に話しかける

「久しぶいな、昂樹」

「久しぶりね！昂樹くん」

そのやりとりにその場の全員が驚く

最初に口を開いたのは深雪だった

「昂樹は、会長とお知り合いなのですか？」

「ん？そーだよ、中学の先輩だよ」

「そうだな」

そんなことを話しながら全員が席に付き弁当を開く

「入学式で紹介しましたが念のため、私は生徒会長の七草真由美です、

それで私の隣から会計の市原鈴音通称りんちゃん」

隣に座っている女性。顔はきれいに整っているが各パーツはきつ

めの印象で、背が高く手足も長く、美少女というより美人と表現する

ほうが相応しい容姿の女の子である。

市原先輩は軽く会釈をする

「私のことをそう呼ぶのは会長だけです」

「その隣が、風紀委員長長の渡辺摩利、それから書記の中条あすぎ、通称

あーちゃん」

「よろしくな」

摩利先輩は単調に挨拶を終わらせる

中条先輩は中学生に見えるくらいの小柄な童顔。リスのような小動物タイプ。

「会長、お願いですから下級生の前ではあーちゃんはやめてください、わたしにも立場というものがあるのです」

「それからもう2人、副会長の範蔵くんと、第2副会長の風止（ふうし）君が今期の生徒会役員です」

すると突然深雪が口を開く

「渡辺先輩」

「ん？どうした？」

「その弁当はご自分で作られたのですか？」

「そうだが…意外か☒」

達也も口をはさむ

「いえ、少しも」

「ん？」

「普段から料理しているかはその指を見ればわかりますから」

渡辺先輩は少し照れながら手を隠す

「そうですよ！お兄様今度から私たちもお弁当にしましょうか」

「それは魅力的だけど、2人になれる場所がね」

「兄弟というより恋人同士の会話ですね」

市原先輩は静かに言う

「そうですか？まあ、確かに考えたことはありません、血の繋がりなければ恋人にしたいと」

達也は普通に、サラツと言いつ

その言葉に深雪と、中条先輩、摩利先輩が反応する

「はっ」

「ふえ」

「ええ」

だが、達也はすぐに

「もちろん冗談ですよ」

それに深雪と中条先輩が同時に声を出す

「えっ?」

「ん?」

達也は深雪をみる

「いえ、あの何でもありません」

全員が食事を食べ終わると真由美先輩が口を開く

「では、そろそろ本題に入りましょうか、当校生徒会長は選挙で選ばれますが、他の役員は生徒会長に選任、解任が委ねられています、各委員会の委員長も一部を除いて会長に任命権があります」

すると摩利先輩が話し始める

「私が務める風紀委員会はその例外の一つだ、風紀委員は生徒会、部活連、教職員の三者が、1名ずつ指名する、今年から生徒会枠が2名になったがな」

「うん、さて、これは毎年の恒例なのですが、新入生総代は生徒会の役員になってもらってます、深雪さん、私はあなたが生徒会に入ってくれることを希望します。引き受けてくださいますか?」

深雪が達也の方を見る、達也はそれを見て少し頷く

するといきなり深雪が席を立ち上がる

「会長は兄の入試の成績をどう存知ですか?」

その言葉を聞いて達也が強く反応する

「有能な人材を生徒会向かい入れるのなら私よりも兄の方がふさわしいと思います」

そのまま深雪が話を続ける

「私を生徒会に加わらせていただく話についてはとても光栄に思います」

「おい深雪」

達也が小さな声で深雪に呼びかける

「よろこんで末席に加わらせていただきたいも思います、兄も一緒と
言うわけにはいきませんか?」

深雪は真由美の方を向く

みんなは困った顔をする

すると市原先輩が話し始める

「残念ながらそれはできません。生徒会の役員は第一科の中から選ばれます、これは不文律ではなく、規則ですこれを覆すためには、制度の改正が決議される必要があります」

「つ、つ、申し訳ありませんでした、武を弁えぬ差し出口お許しください」

深雪は頭を下げる

真由美先輩は困ったように話し始める

「それでは深雪さんは書記として今期の生徒会に加わっていただくと言うことでよろしいですね」

深雪は少し不満そうだから納得する

「精一杯務めさせていただきます」

深雪はゆつくりと席に座る

「具体的な仕事内容あーちゃん聞いてくださいいね」

「決まったぽいなー、どんだけお兄様好きなんだよ深雪は」

すると、エキドナから声がかかる

「ねえ、昂樹、さっきの話だと昂樹は2科生でしょ、なら何でここに呼ばれ

たの？」

「あ！確かにこれって何でだろう）ちよつといいですか？」

昂樹は七草先輩に話しかける

「どうしたの昂樹くん」

「いや、達也は2科生だから生徒会に入れない、でも、俺は2科生です。なら何で真由美先輩はここに俺を？」

すると摩利先輩が勢いよく席を立ち上がる

「そうだ！昂樹！良いこと言った！昂樹は中学も風紀委員ということ特別視していたが、2科生だ、風紀委員は2科生を選んでも規定違反にはならない。ということ、余ってるもう一枠をつかえば！」

続いて真由美先輩も立ち上がる

「そうよ！風紀委員なら問題ないじゃない！摩利、生徒会は達也くんと、昂樹くんを風紀委員に指名します！」

達也も席を立つ

「ちよつと待ってください」

達也を差し置いて昂樹は

「俺いいよー、知り合いが近くにいた方がいいからなー」

「昂樹：だか、俺の意志はどうなるのですか？ だいたい風紀委員が何をやる委員なのか説明を受けていませんよ」

すると石原先輩が反論するように話はじめる

「妹さんにも、神里くんにも生徒会の仕事について具体的な説明をしてませんが？」

「いや、それはそうですが」

それを七草先輩がなだめる

「まあまあ、りんちゃんいいじゃない、達也くん、風紀委員は学校の風紀を維持する委員です。」

「それだけですか？」

達也はあーちゃんを見つめる

「ふ、風紀委員は魔法使用による校則違反者の摘発と魔法を使用した騒乱行為の取り締まりです」

達也は摩利先輩を見る

「念のために確認させていただきませんが」

「何だ？」

「風紀委員は喧嘩が起こったら力づくで止めなければならぬ、そう言うことですよね？」

「まあ、そうだな」

「そして魔法が使用された場合も同様であると」

「できれば使用前に辞めさせるのが望ましい」

すると達也は怒ったように話す

「あのですね、俺は実技の成績が悪かったから2科生なのですが！」

摩利先輩は腕を組みながら返す

「構わんよ、力比べなら私がいる、しかも君の隣には魔法が一切使えない、実技の最下位がいるじゃないか」

「うぐつ、今それいいいますか、泣きますよ」

ここでチャイムがなる

「続きは放課後にしたいのだが構わないか？」

「わかりました」

結局決まらないまま昼休みが終わってしまった

午後の授業は魔法実習室cでの演習

演習台に並ぶ間さっきの件をレオと話していた

「風紀委員？」

「そうそう、ま、達也はまだ決まっていなくて放課後また、話を聞きに行
くらしい、あ、俺もね」

「つたく、勝手なんだから」

誰にも聞こえない声でエリカはその言葉を吐き捨てる

「エリカの番だぞ」

「あーごめんごめん」

エリカがタッチパネルに触れ演算を開始し、台車を動かす、これが
魔法の発動の速さを測る機械らしい

「よしー」

エリカがタッチパネルから離れ

次に並んでいる達也がタッチパネルに触れ、演算を開始する

しかし、少し遅く始めた隣の男子が先に演算を終わらせて台車を走
らせる

「(遅い)」

遅れて、達也の台車も動く

「(遅すぎる)」

「たーつや、そろそろいいかい？」

後ろの昂樹が話しかける

「すまない」

「全然大丈夫」

昂樹も達也と同じタッチパネルに触れる

だか、魔法式どころか、魔法を使用したときに見えるサイオンさえ
も出なかった

「くーやっぱり魔法使えないわー」

がつくしする昂樹にエリカが声をかける

「気にしないほうがいいわ、昂樹は体術とか刀術があるでしょ？」

「まあ、そうだなー」

その瞬間レオが昂樹に言葉で重い一撃を放り込む

「よく合格できたな」

その言葉に昂樹は更にダメージを受ける

「うぐっ」

「ばか、何てことこのよ」

レオをエリカが叩く

「イツテエな」

「今のはレオが悪い」

「今のはレオ君が悪いですよ」

「そうだな、今のは俺が悪かったすまねえ」

「全然大丈夫」

10話 生徒会指名

そして放課後

3人は生徒会室のドアの前に立つ

「よし！入るか」

「ああ（やはり俺はふさわしくない丁重に断ろう）」

達也はそう思いながらもノックをかける

「失礼します」

達也、昂樹、深雪の順に入る

入ると、みんな作業をしていた

「司波達也です」

「神里昂樹です」

「司波深雪です」

するとこちらに気づいた摩利先輩声をかける

「よっ、来たな」

「いらっしやい深雪さん、達也くんも昂樹くんもご苦労様」

近くを見ると窓の外を眺める2人の男がいた

そしてこつちを睨むむと昂樹の方に歩いて来る。

その男は昂樹と達也の避けて深雪に自己紹介をし始める

「副会長の服部刑部です」

「同じく副会長の風止櫛（ふうし しきみ）です。司波深雪さん生徒会

へようこそ」

深雪はその行動に怒ったように睨み口を開こうとする

だがそれよりも先に昂樹が一言言い放つ

「くだらない……」

その声に振り向いた風止は昂樹ことを睨む

「ああ？・テメエやるのか☒」

だがそれに負けないぐらいの勢いで昂樹が言い放つ

「黙れ、なんで真由美先輩の計画した生徒会に差別をするような奴がここにいて、真由美先輩の目標は差別撤廃のはずだが？」

「だからなんだ」

「俺はあんたより1年も長く真由美先輩と、摩利先輩の元で指導を受けてきた。お前はそんなことにも気をつけて行動できないのか?」
「くそが!」

風止は殴りかかる

しかし昂樹は躲し風止の身体を掴むと地面に抑え込む

「暴力は反対だな」

「くっ離せっ!」

「そこまでよ、2人とも!」

その声に昂樹は手を離し七草先輩に頭を下げる

「見苦しいところをお見せしました」

風止も起き上がり謝る

「申し訳ございません」

七草先輩は手をたたきはなす

「さっそくだけど、あーちゃんよろしくね」

「はい…」

摩利先輩昂樹と達也を見る

「じゃあ、あたしらも移動しようか」

「どちらへ?」

「風紀委員本部だ、色々見てもらいながらの方がわかりやすいだろうからね」

そう言って摩利先輩はドアの方へ向かう

「渡辺先輩待ってください」

服部先輩は摩利先輩の前を塞ぐ

「どうした? 服部刑部少丞範蔵副会長」

摩利先輩にそう呼ばれた服部先輩は少し恥ずかしそうに

「フルネームで呼ばないでください」

「じゃあ、服部範蔵副会長」

「服部刑部です」

「それは名前じゃなくて官職だろ」

「今は官位なんてありません、学校にもこの名前で出しています! つ、

そんなことを言いたいのではなく」

そのやり取りを見てこの人はいい人なのかと思う昂樹

「じゃあなんだ☒」

「その一年生2人を風紀委員会に任命するのは反対です過去にウィードを風

紀委員に任命した記録はません」

強気の服部先輩は達也と昂樹を睨みながらそう言い放つ

だがその言葉に少し服部先輩を睨む

「2科生をウィードと呼ぶことは禁止されている、私の前で口にするとはいい度胸だな」

「取り繕っても仕方ないでしょう、実力のないウィードには務まらない」

摩利先輩は昂樹と達也を見て

「実力と言っても色々ある。達也くんには発動された魔法式を直接読み取る目と、頭脳がある。そして、昂樹は1年間私の元で得た経験がある」

その言葉に驚きを隠せない服部先輩

「まさか！基礎単一工程起動式さえアルファベット3万字相当の情報量があるんですよ？それを一瞬なんてできるはずがない」

「常識的にはできるはずがないが、彼の特技には価値がある、未遂犯による強い抑止力になる。そして、もう一つ、お前の言う通り1科生と2科生に壁がある、1科生が2科生を取り締まり、その逆がない、だからこそ壁ができてしまった、私の指揮する委員会が差別意識を持つのは、私の好むところではない」

服部先輩は顔を顰める

「会長！副会長として、この2人の就任に反対します、魔法力に劣る2科生が務まるはずがない」

その言葉を遮る深雪

「ちよつと待ってください！確かに魔法実技の成績が芳しくありませんが、それは評価方法に兄の力が適合してないんです、実践ならば誰にも負けません！」

服部先輩は深雪の言葉を聞き冷静に答える

「司波さん、魔法は自らを厳しく律することを求められています、みびいきに目を曇らせることはあつてはならないのです」

「お言葉ですが、私は目を曇らせてはいけません、お兄様の本当の力を持ってすれば」

達也が、深雪を抑えるように手を出す

「はっ…」

すると達也は服部先輩の横へ行き、

「服部副会長俺と模擬戦をしませんか？」

「なにっ？」

みんなの顔が険しくなる

服部先輩は達也を強く睨む

「思いがなるなよ、補欠の分際で！」

一方の達也も睨み返している

「深雪の目が曇ってないと示すためにはやむ終えません」

風止も昂樹に向かって話す

「なら俺もこいつと模擬戦をやりたい」

「俺？まあ、いいけど」

深雪、昂樹、達也で模擬戦室に向かう

「お兄様、申し訳ございません」

謝る深雪をなだめる達也

「お前が謝ることじゃないさ」

「ですが私のせいでもたお兄様にご迷惑が」

達也は深雪の頭を撫でる

昂樹は咳払いをする

「おーい、俺もいるんだが☒」

「昂樹も頑張ってください」

第三演習室

「まず俺からだな、こいよ神里」

「はっ」

昂樹は前に出る

「審判は渡辺真莉が担当する。行くぞ？用意！」

「(まずは神里を後ろに飛ばし、気絶させる、これで終わりだ、魔法なら1科生の方が上なんだよ)」

「始め！」

風止は腕のCADを操作して魔法を発動

すると思いきやすぐに腕の力が抜け棒立ち状態になる

「ふう…これは俺の勝ちかな」

昂樹はすでに写輪眼を使っていた

何が起こったかわからない中条先輩

「えっ？」

「勝者神里昂樹」

「よし」

すると真由美先輩は得意げに言い放つ

「こうなることは予想済みだったわね、まず昂樹に初見じゃ勝てないもの」

それに摩利先輩も乗る

「そうだな、まず無理だ」

「絶賛ですね…。(まっ、朝達也に初見の幻術を看破されましたがね)」

「次は達也君だ」

すると達也はアタッシユケースから銃型のCADを取り出し位置
つく

それをみた摩利先輩が質問をする

「いつも複数のストレージを持ち歩いているのか？」

「ええ、汎用型を使いこなすには処理能力が足りないのです」

その時服部先輩は静に考えていた

「(魔法師同士の戦いは先に魔法わ当てた方が勝つ、CADによって魔

法発動速度でブルームがウィードに負けるはずがない、ましては相手は特に実技が不得手ときく、いや、先程の試合のようなことがあるこれはあんまり信用しない方がいいのか？、いや、始まる前から勝者決まっている。開始直後スピード重視の単純な起動式で司波より早く展開を完了させる、相手を10メートル後方に吹き飛ばし衝撃で戦闘不能にする。これで俺の勝ちだ)」

「準備はいいか？始め！」

摩利先輩が合図すると服部が素早くCADを操作するそして、展開がしかし、達也が神速で移動し消えた直後、服部が倒れ、その背後にはCADを構える達也がいた

その光景に昂樹、深雪以外は息を呑む

達也は摩利先輩の方を見る

「勝者司波達也」

中条先輩と、市原先輩が服部先輩を運び風止先輩の横に運ぶ
達也はCADをしまおうと動くが摩利先輩は再度達也に質問をする

「待て、今の動きは、自己加速術式を予め展開していたのか？」

「魔法ではありません、真正銘身体的な技術です」

「兄は忍術使い九重八雲先生の指導を受けているのです」

「あの九重先生にか、ここにも昂樹みたいなやつがいたとはな」

摩利先輩は昂樹を見ながらそう言う

「あの攻撃に使ったのも忍術ですか？サイオンをそのまま放ったようにしか見えなかったのですが、」

「そうです、基礎単一系振動魔法で波を作り出しているだけです」

「しかし、それだけでは、服部君が倒れた理由にはなりませんか？」

昂樹は気づいたことを話す

「酔ったからじゃないの？達也そうだろ？」

「流石だ、昂樹。」

真由美先輩は疑問を達也に聞く

「酔った？一体何に？」

達也はそれを解説し始める

「魔法は強いサイオンを使うがために予期せぬ波動により酔ったと体が感じてしまうのです」

「どうしてそんな強い波動を?」

すると市原先輩が話をはじめ

「波の合成ですね、振動数の異なるサイオン波を3連続で作り出し三つの波がちょうど服部くん重なる位置で合成される調整して、強い波動を作り出したのかと」

「お見事です」

昂樹は達也の試験結果を考えて話す

「でも、達也、それぐらいの処理速度があれば実技何でそんなに低いんだ?」

すると話を裂くように中条さんが割り込んでくる

「あのー司波君のCADはシルバーホーンではないですか?」

中条先輩の声に真由美先輩と摩利先輩が反応する

「シルバーホーン?あの謎の天才魔法士トールラスシルバーのシルバー?」

「トールラスシルバー?ってあの?」

中条先輩は興奮したように早口になる

「その本名、など、プロフィールの全てが謎の奇跡のCADエンジニア、世界で初のループキャストを実現した天才プログラマー」

「でもりんちゃんそれっておかしくない?」

「ええ、本来ループキャストとは、全く同じ波動を連続発動するためのもの、振動数の異なる波動は作れません」

昂樹は苦笑いしながら

「でも達也。てことは、座標、強度、持続時間、振動数まで、変数化するととなると…化け物なんだなこれは」

「多変数化は処理速度も演算規模としても、干渉強度としても、この学校では評価されない項目ですからね」

すると服部先輩はよろけながら立ちあがる

「実技試験における魔法力の評価は、発動速度、魔法式の規模、対象の情報を書き換える強度できまる、なるほど、テストが本当の実力を示

していないとはこう言うことか」

真由美先輩は服部先輩に近づくと

「服部くん大丈夫ですか？」

「だっ、大丈夫です！ だか、神里君の場合もそうなのか？」

「あ、俺？」

昂樹が話し始めようとすると摩利先輩がわって入ってくる

「昂樹は魔法式そのものが作れないし、発動もできない、だから試験は本当の実力をしめしているな」

「ちよ、摩利先輩！ そんなキツパリ言わなくても!!？」

「はあ、司波さん」

「はい」

「先程はみびいきなど、失礼なことを申し上げました、目が曇っていたのは僕のほうでした」

服部先輩は頭を下げる

「私こそ生意気を申してお許しください」

深雪も頭を下げる

服部はそのまま部屋を出ていく

「さて、色々想定外のことだったが、当初の目的通り風紀委員本部いこうか」

3人は移動し風紀委員本部に到着する

「少し散らかっているが、適当にかけてくれ」

達也は散らかっている物を見て摩利先輩に声をかける

「先輩ここ片付けてもいいでしょうか？ 魔法技師としてこの状態は耐え難いものがあるんですよ」

「魔法技師？ あれだけの対人戦闘スキルがあるのに？」

「俺がどんなに足掻いてもc級ライセンスまでしか取れませんから」

昂樹と達也は軽く掃除をする

すると摩利先輩は2人に話しかける

「君たちをスカウトした理由はもうあらかた話してしまっただけかな？」

「差別意識のことですか、どうですかね、今の1科生でもあると思いま

すよ、昨日なんていきなりお前を認めない宣言を食らいましたから」

「達也は確かに、言われてたからな」

「森崎のことか」

「そうです」

「ああ、教職員推薦枠でうちに入ることになったる」

その言葉に少しの驚きを見せる達也

「えっ?」

それを少し笑いしながら

「君でも慌てることがあるんだな」

するとドアが開く

「失礼します、おっ、姉さんいらしてたんですか」

「本日の逮捕者0名」

摩利が1人の男に近づき

紙の棒で叩く

「姉さんって言うな、何度言ったらわかるんだ!」

「ところで委員長、そこの2人は新入りですかい?」

「そうだ、今期の生徒会枠で入ることになった」

「へーえ」

達也と、昂樹の肩のエンブレムを見る

「門なしですか」

「辰巳先輩、その表現は禁止用語に抵触する恐れがあります、この場合2科生と言うべきかと」

すると摩利先輩は昂樹と達也を見ながら話す

「お前たち、そんな単純な量圈だと足元を掬われるぞ、ここだけの話だがさつき服部と、風止が足元を掬われたばかりだ」

それを聞き、2人は「えっ」と、驚く

「そいつらがあの2人に勝ったってことですか?」

「ああ、正式な試合でな」

「なんと!入学以来負け知らずのあの2人が新入生に敗れたと!」

「そいつは心強え」

腕を組む

「逸材ですね、委員長」

すると達也をみる

「意外だろう、この学校はブルームだとか、ウイードだとか、つまらない肩書きで優越感に浸ったり、劣等感に溺れる奴らばかりだ、正直言つてうんざりしていたんだよ、私は。幸い、まゆみも部活連代表の十文字も、私がそんな性格だつて知っているからな、生徒会枠と、部活連枠はそう言う意識の少ないやつを選んでくれている。ここは、君たちにとつても居心地のわかるくないところだと思うぞ？」

すると辰巳先輩が近づき、

「3ーcの辰巳鋼太郎だ。よろしくな、司波、神里、腕の立つやつは大歓迎だ」

手を出す

「2ーdの沢木碧だ、君たちを歓迎するよ、司波くん、神里くん」

昂樹と、達也は2人と握手する

「1年の司波達也です。」

「同じく1年の神里昂樹です、こちらこそよろしくお願いします。」

11話 部活勧誘期間

次の日風紀委員会本部に全メンバーが集まり会議を行っていた
そして摩利が勢いよく席を立つ

「今年もまた、あの馬鹿騒ぎの1週間がやってきた！有力な部員の獲得は重要課題であり、熾烈を極める。殴り合いや、魔法の打ち合いなんてこともある。今年は、前年度と違い、卒業生分の補充ができた、立て！」

達也、昂樹、そして、森崎が立つ

「11aの森崎駿と、11eの司波達也、同じく11eの神里昂樹だ、早速パトロールに加わってもらおう」

すると他の風紀委員が昂樹と達也のエンブレムを睨むように見る
「役に立つんですか？」

「心配するな、3人とも使えるやつだ、特に昂樹は中学のときに、私の元で1年間風紀委員をやっているから、仕事もある程度ならわかって
いるはずだ、他に言いたいことがあるやつはいないか？」

その声に反応するものはいなかった

「よろしい、では早速行動に移ってくれ出勤！」

「はい！」

他の先輩方がでていく。すると摩利先輩は3人に近づく

「まずは3人にこれを渡しておく、記録用の録画機に風紀委員の腕章だ、昂樹は知っていると思うが風紀委員は校内でもCADの使用が許可されている、使用に関しても許可をいちいち取る必要はない、だが、不正使用に関しては委員長除名、学校からの罰を課せられる、甘く考えないことだ」

すると達也は近くの備品を見ながら話す

「質問があります、CADは委員長の備品を使っても構いませんか？」

「ああ、構わない」

達也は備品からCADを取る

「ではこの2機を借りていきます」

「2機？君は本当に面白いな、では、パトロールを頼んだぞ。あと、昂樹は少し残ってくれ」

摩利先輩は「2機」という言葉に疑問をいだきながらも2人を見送る

「はい」

「了解です」

2人はその場を後にする

2人が部屋を出たのを確認すると摩利先輩が話し始める

「昂樹、久しいな」

「はい。お久しぶりです、2科生となっしまいましたでしたが、これからまたよろしくお願いします」

昂樹は深く頭を下げる

「ああ、頼むぞ。あと、魔法の使用は十分に気をつけろよ、昂樹の力はこの世界の魔法に該当しないがそれでも摘発される可能性もある」

「わかりました、気をつけます」

「そういえば昂樹。達也くんと、かなり親しいようだがあの事は言ったのか？」

「いえ、写輪眼と星装顕符は見せましたがそれ以外はまだ」

「そうか。まだ全てを知っているのは私と真由美だけか… 信頼されているな」

「信頼してますよ！お2人に何かあったら必ず守ると決めていますから！！？」

「ありがとうな！では、行ってこい！」

「はい！」

昂樹は廊下に出る

「達也は流石にいないか…1人で行動すつか」

数時間後

昂樹は警戒しながらも意外に楽しんでいた。

「ふー、疲れたー。でも割と賑やかでいいな」

昂樹は正門の辺りを歩きながらそう言葉を放つ

「そろそろ、休憩しようかな…」

すると近くを見ると目の前で各運動部員立の中心にいる美少女が争奪戦に巻き込まれていた、言わずもがなその美少女はエリカだった。あれはもう争奪戦と言うより、獲物の奪い合いと言ったほうが正しい。

その争いはどんどん過激になっていく

昂樹はエリカを助けるために飛び出す

〔神里流神速〕

エリカのところへ向かって一気に加速する

そして近づくと上手いこと部員たちから手を離させる

エリカは突然風のように現れた昂樹に驚く

「昂樹？」

「エリカ、走るよ！」

そんなエリカを気にせず再度加速する

「うわあ！」

昂樹はエリカの手を引いて、校舎の裏手に隠れる

「ふう、大変そうだねエリカは…」

「最悪よほんとに」

昂樹はエリカに話しかけようと振り返る

「じゃあ、暇だし一緒に回る…：：：つてエリカ服がすごいことになってるぞっ！」

エリカは自分の服を見る。制服がはだけてネクタイが抜き取られており、胸元がはつきりと見えていた

昂樹はゆつくりとエリカから目を逸らす

「見た？」

エリカは顔を赤く染めながらも昂樹のことを睨む

「見えてないといえ嘘になる。しつかりエリカの綺麗なお肌と、綺麗な形をした胸が見えました」

「っ…！堂々となんてこと言うのよ、バカ」

エリカは顔を一瞬赤くしたがすぐに叩いてくる

「すまんすまん。ほら服直して行くよ」

少しして、2人は校舎裏から出てくる

「ねえ、これから時間ある?」

「ん?あるよ。」

「すこし一緒に行動しない?」

「もちろんいいよー」

そこから1時間ほど一緒に行動し2人は剣道部を見るために第二体育館に来ている

「おーやってるね!剣道部」

するとエリカは剣道部を見ながら話す

「珍しいでしょ、剣道部があるんなんで、そう思わない?」

昂樹はその質問の意味がわからなく聞き返してしまう

「そうなのか?」

「そうよ、剣道部は多いけど、剣道部はなかなかないわよ?」

「え?剣道と、剣術ってちがうのか?」

「全然違う…とは言い切れないけど、別物ね。一番の違いは、剣術は魔法ありきのものなの」

昂樹はエリカの説明に納得する

「なるほどー!」

「でもつままないわね」

「どうして?」

レギュラークラスの女子が華麗な一本を決めたのを見てエリカが不満そうに呟く

「だってこれ台本通りでしょ?もはや演習じゃなくて殺陣よ殺陣。つまらなくもなるわ」

「まあ、でもこれは勝つことが目的じゃなくて、興味を持ってもらうのが目的だからじゃないの?」

「それもそうね」

先程まで演習をしていた女子生徒が面を外した。その瞬間、男子が色めきだった声を上げる。

昂樹はその人物を知っていた

「あれって、二年前の全国女子剣道大会優勝者の壬生紗耶香先輩だけ。剣道小町とかでマスコミに取り上げられてたな」

その名前を聞いたエリカは感心するように昂樹を見る

「よく知っているわね」

などと言いついてみると、剣道部の演習に一人の男子生徒が乱入する。

それをみたエリカは不敵な笑みを浮かべる

「なんか面白くなってきたわね！近くで見るとよ！」

「おいエリカ！」

エリカは昂樹を半ば強引に腕を引っ張る

引っ張られながらもエリカに質問する

「エリカ……あの男子知ってるのか？」

「面識はないけどね。女子の方はさっき話したけど、男子の方は剣術の関東大会チャンピオンの桐原武明ね」

「（関東……？）全国ではないのか」

「全国大会は高校からなの、だから関東はすごい称号なのよ」

先程の女性、壬生先輩は現れた桐原先輩をにらみながら言う

「桐原君！またなの？いい加減に諦めてちょうだい！」

「わりいな壬生！」

そう言う桐原は壬生に竹刀をかまえて突貫する。手に持つ面を投げ捨てて、同じく竹刀で応戦する壬生。

「くっ！いきなり何を！」

「いいかから戦え！」

壬生先輩は桐原先輩を止めることができず二人は本格的に戦い始める

昂樹は2人の戦いを見ながら考えている

「（とめるか？いや魔法を使用せずに打ち合っているだけのこの状況だけでと剣道部の演習を手伝っていただけと言われるだけか……少し危険だけど対処するのはまだいいか……）」

「はあっ！」

「やあー！」

桐原と壬生のお互い手加減のない苛烈な攻撃。お互いの攻撃を弾きながら決め打ちを狙う二人。だがこの戦い、有利なのは壬生先輩。「恐らく相手を殺せる技術である剣術を使う桐原先輩よりも、あくまで剣技として強い剣道をしている壬生先輩の方が有利なのかな…。」

そして遂に桐原の腕に壬生の竹刀が直撃する。

それを見て昂樹が声を出す

「相打ち？」

「いや、相打ちじゃないわ」

壬生先輩が先に声を出す

「真剣なら、致命傷よ。私の方は骨に届いてない、素直に負けを認めなやう」

「真剣…？真剣と言ったな？今」

勝ちを宣言し、桐原先輩を下がらせようとする壬生先輩。しかし桐原先輩は不敵な笑みを浮かべていた。

途端桐原先輩は、後退した後、CADを操作する

「真剣勝負がお望みなら、そうしてやるよー！」

桐原先輩の竹刀にオレンジの魔法が纏わりつく

「嘘でしょ!?!くっ！」

桐原先輩が使用したのは「高周波ブレード」、武器が高速振動することで、物体を脆くして切り裂くと言った魔法である。

驚きのあまり壬生先輩は動けなかった、桐原先輩が迫ってくるそんなのでのところで躲す

「落ち着いて！桐原君！」

壬生先輩の忠告など耳に入らない

「これはまずい、死ぬぞ」

咄嗟に昂樹が飛び出す、隣を見ると達也も飛び出していた。

「(達也?)」

昂樹に気づいた達也はこつちを見て、目配せする

達也は、壬生先輩と桐原先輩の間に入ると桐原先輩に向かい、腕をクロスしてなにかの波動を発射する。すると、高周波ブレードが弾けるように解除される。桐原先輩は驚きのあまり、足を止める

「こつちだ!」

その一瞬、昂樹は桐原先輩の竹刀を素早く振り払い、背負い投げする

「ぐはっ」

昂樹はすぐに桐原先輩を押さえる

「ナイスだ、助かったよ昂樹」

「いいのさ、こつちこそありがとう」

昂樹は耳につけている通信機で連絡をする

「魔法の不正使用のため桐原先輩を連行します」

すると近くで見ていた剣術部の3年が叫ぶ

「おい!一年、それも二科生のクセして嘗めた態度取ってんじゃねえぞ!」

1人が殴りかかってくる

昂樹は、その拳を止める

「なっ」

「委員会活動妨害として、あなたも連行しますよ」

昂樹は念の為警告し注意をうながす

「昂樹、注意、右足蹴りくるよ」

「バカが」

男の蹴りが来る前に鳩尾に一撃を入れる

「かはっ」

ドサッ

「くそ!」

剣術部部員の2人はCADを、操作して魔法を放とうとする

「馬鹿野郎！（くそ、間に合わない！）」

すると達也が右手を突き出したと同時に魔法が解体される

「（あれは、俺が前世で使ってた魔法解体（マジックキャンセル）に似てるな、いやそれよりも先にあっちが優先か）」

「昂樹は右を頼む」

「了解」

2人は一気に懐に入り気絶させる

「此方第二小体育館。逮捕者一名、その他の3名怪我をしているので担架もよろしくお願いします」

12話 部活連本部

第一校部活連本部にて

腕を組みながら摩利先輩はゆっくりと昂樹と達也を見る

「で、当初の経緯は見ていないんだな？」

「はい」

「昂樹も同じか？」

「はい……自分が見たのは剣道部の壬生先輩と、剣術部の桐原先輩が言い争っているところからです」

「最初2人が手を出さなかったのはそのせいかしら」

すると昂樹よりも先に達也が反論する

「打身程度で済むのであれば当人同士の問題かと」

「それで昂樹。取り押さえたら桐原はどうした？」

「怪我をしていたので、そのまま保健委員に引き渡しました。自分の非を認めたので、これ以上の処置はしませんでした」

「ふん、いいだろう。風紀委員会としては今回の事件に関しては懲罰委員会持ち込むつもりはない。どうだ十文字」

十文字と呼ばれた男。全クラブ活動の統括組織。部活連の会頭、十文字克人、苗字に10を関するナンバーズの名門、次期十文字家の当主

「寛大な決定に感謝する、殺傷性の高い魔法を使ったのだ。本来なら停学処分だが、本人もわかっているだろう、今回のことを教訓とするようによく言い聞かせておこう。だが剣道部はそれでいいのか？」

十文字は摩利先輩の方を見る

「喧嘩を買った時点で同罪だ、最後にもう一度確認しておきたい、魔法を使用したのは桐原だけか？」

達也を見る

「はい」

真由美と、摩利は昂樹の方も見る

「はい、正面にいた俺から見ても使用はありませんでした」

「そうか、昂樹が言うのであればより信頼できるな。ご苦労だった」
「失礼します」

2人は部屋を後にする
静かな廊下を歩く2人

すると達也が口を開く

「すまない、先程は助かった」

「気にすんなよー、ある程度わかってたからな。だけど、俺を信頼してくれている先輩2人にウソをつくことになったんだ、仮1つだぞ、まーみんな待つてるし今日は帰ろうぜ」

「ああ、仮一つにしておく」

近くの喫茶店

「こんな遅くまで待たせて悪かったな、遠慮なく食べてくれ」

メンバーは達也、深雪、昂樹、エリカ、美月、レオの6人

レオは運ばれてきた紅茶を飲む

「じゃあ、遠慮なく」

「いただきます」

みんなで雑談しているとレオが急に話し始める

「それにしてもその桐原先輩って、殺傷性ランクBの魔法を使ってたんだってな。よく飛び込めたな」

「まあ、高周波ブレードは魔法の範囲も狭いし、そこらへんの刀と変わらんよ」

美月は昂樹の反応する

「それって、真剣の対処は簡単と言っていると同じことですよ？」

その言葉に深雪は得意げに話す

「大丈夫よ、美月。昂樹はお兄様と同じくそこらへんの有象無象の真剣相手なら素手で余裕なのよ」

それにレオは驚きを隠せない

「マジかよ、関東トップを有象無象とは恐ろしいな」

「それよりもお兄様、キャストジャミングをお使いになったでしょ」

深雪のことを見て優しく笑う達也

「深雪には敵わないな」

「それはもうお兄様のことなら深雪はなんでもお見通しですよ」

その時昂樹は達也と深雪の周りを見る

「(2人の周りにピンク色の何かが見えるぞ)」

「なんか、仲間はずれ感が…ってそれって兄弟の会話じゃないぜ！」

達也と、深雪は当たり前前のように反応する

「そうかな」「そうかしら」

「うぐっ」

レオは机に額を当てる

昂樹はレオの背中を擦りながら

「レオ、この2人にはツツコミを入れちゃダメだ、例外のこれまた例外だからな！」

「昂樹そうだな俺が間違ってたよ」

「その言われようは著しく不本意なんだが」

「いいじゃありませんか、私達が強い兄弟愛で結ばれているのは事実です」

達也と、深雪は体を近づけ合って言う

「ぐはっ」

今度はエリカも机に額を当てる

昂樹も呆れながら苦笑いする

「こりゃ手遅れだ」

「深雪、悪ノリもほどほどにな」

それから何もなく部活勧誘週間は終わる

達也は達也で、なんかあったらしいがまあいいだろう

そして、時が経ち魔法速度計測室にいる昂樹達

達也と美月は2人でなんかやってるが、こっちもこっちでやるか

これは、魔法構築速度とかなのか、わからんが

「(試しに、前世の魔法式打ち込んでみるか)」

タツチパネルに手をおき、構築する、そして発動！

35 m秒と表示される

「あつれ…っ！」

すると後ろにいたクラスメイトが大声で隣の男子に話し始める

「おい、あいつ35 m秒だぞ！、あり得ない速すぎる！世界最高速度だぞ！」

それをみた達也は様々なことを考える

「(どう言うことだ、魔法が使えないんじゃないのか?)」

だがわからないのも当然。なぜなら本人でさえわからないのだから

「(いやいや、まてまてまて、おかしいおかしい)」

頭の中でエキドナが昂樹に声をかける

「落ち着け昂樹！」

「落ち着けるかってんの、なんで前世の魔法の構築が使えんのさ」

「なんでだろう。確か… 神は魔法が違うと、言ったな」

「ああ」

「いやまて、確かに違うとは言ったが、使えないとは言っていない、このことから推測するに、ボクが少し工夫すれば使えるのか…？」

「とりあえず、機械の故障にしとこう」

「それが先決」

エキドナとの会話を終えた昂樹は再度構える

「もう一回やるか！」

「魔法発動検知不能、再度お試しください」

「あれーさっきのは機械の故障か！」

昂樹は明らかに嘘っぽい声を出す

「やっぱそうだよな、あいつがあんなに速いわげがない」

「ほーだな、行こうぜ」

だが、この一件を達也が見逃すはずがない

昂樹はすぐに逃げるようにその場を後にする

13話 復讐

勢いよく部屋から出た昂樹は誰もいない静な廊下を歩いていた

「主人連絡があります」

後ろから突然吹雪が透明化したまま話しかけてくる

「吹雪、どうした？」

「以前から目をつけている、中規模組織「雷神」についてですが、詳しく調べた結果主人の父親が所属していると確認が取れました」

「ふう…… やつとか」

「時間がかかってしまい、申し訳ありません」

「いいや、吹雪がいなかったらこれよりも時間がかかっていた」

「ありがとう。それで、雷神に関してですが非人道的な人体実験のほか、一般人の殺害、薬漬けにして精神を壊すなどさまざまなことをおこなっていました。おそらく主人の父親は幹部以上かと、あの男は自分の子供を多数人体実験に使用しているという報告も」

「っ…… その組織潰しても大丈夫なのか？」

「問題ないかと。既に警察も動いているが、まだ、本部は掴めていない、消すなら今しかない」

「そうか、なら今から行こう」

教室に入ると昂樹はエリカに話しかける

エリカとは部活勧誘期間の一件でかなり仲良くなった

「エリカ少しいいか？」

昂樹はエリカに近づき話しかける

「ん？どうしたの」

「これから行くところが出来た、早退連絡を先生に頼める？」

エリカは昂樹の声になにか感じたのか少し混乱するも承をくれた

「え…… わかったわ」

「ありがとう」

昂樹と吹雪は飛行魔法と透明化魔法を付与しながら上空を飛んで

いる

「ここです」

田舎にある15階建ビル

その光景をさすがの昂樹でも驚く

「いや、これ明らかにおかしいよね。よく警察気づかないな」

すると脳内でエキドナが話しかけてくる

「ここ」帯に高度な隠蔽魔法がかかっている、達也くんぐらいにならないと気づかないね」

「まじか、そりゃ見つからんわ」

すると突然横に居た吹雪が膝をつき頭を下げる

「主人、今回は私にやらせて欲しいです。主人の怒りも承知の上でお願いします」

「んーいいよ。でもあいつだけは生かしてね、あと捕まっている人の

救出も絶対条件だ。それ以外は好きにしていいい」

「ありがとうございます。」

吹雪は素早く飛び上がりビルに向かって行く

昂樹 s i d e

顕現したエキドナは吹雪を遠目に見ながら話す

「どうなるかしらね」

「余裕だろ」

昂樹は地面に手を当てると唱える

「隠蔽魔法発動」

今かかっている隠蔽魔法を上書きし、さらに強力にする

「吹雪のお手並み拝見だね」

「そうだね」

吹雪 s i d e

「主人様が隠蔽魔法を。助かります」

吹雪はビルの近くまで行き地面に降りる

同時に吹雪は扇子を持ち、唱える
すると眼が蒼く光る

「氷の神能・氷封（ひょうふう）」

吹雪が扇子を振ると巨大な氷の壁がビルを囲む

「これで逃れることは出来ない……」

吹雪が壁に穴を開けビルに入ろうとすると、5人の男が出てきた

「ちっ女かよ、だけどこんだけの魔法力があるなら十分だな」

「なあ、こいつ上玉じゃねえか！捕まえたら楽しんでいいよな！」

「目障りだ……消えるがいい……絶対零度」

吹雪が軽く足あげ静に地面につけると、あたりの気温が急激に下がっていくとともに地面が凍っていく。その凍結は男たちの足から徐々に凍りつかせ、ついには全身が凍りつく

「弱すぎる」

吹雪はビルに入ると次々と立ち塞がる男たちを殺して最上階を指す

その中で1人吹雪が殺さない奴がいた、

それは昂樹の父親だ、命令は無視できない

最上階についた吹雪は1つのドアを開ける

するとそこには50代ぐらいの大柄な男が居た

「お、お前は何者だ」

「お前が雷神のトップか。名乗るわけがない、貴様は無実の人間を殺した。それは主人が許さない……ここで消えてもらう」

吹雪は雷神に絶対零度にも近い、冷たい視線を送る

「ま、ま、まて、誰に頼まれた？そうだ金ならいくらでも出す。だから許してくれ。もうこんなことはしない。いやそんなことよりお前の主人よりも俺の方がいいぞ、金もあるどうだ、仲間にならないか？」

いきなりわけのわからないことを言い始める男の話を聞く吹雪

「ほう？」

それを見た男は更に声を上げる

「俺が開放してやろう！幸せになれる、お前も主とやらに従わなくて

も自由に行動もできる、どうだ？」

だが無惨にもそんな提案など伝わる吹雪ではない

「面白くないな、全く。私は私の意思で主に仕えている。仕えることが苦痛だと思ったことなどない」

「そうか、なら死ね」

雷神は後ろに隠していた刀を構え一致に距離を縮める。そして吹雪を右肩から斬る

だが、刀は吹雪を斬るところかすり抜ける

「なっ……くそ！」

雷神は何回も吹雪を斬る。だがその刀が吹雪にダメージを与えることはなかった

「はあ、はあ、なんで……だ……」

すると吹雪の身体の半分が水のように透き通る

「我の神能は水、物理攻撃は効かない。」

「ありえない！そんな、そんなもの、現代の魔法を超えている！」

吹雪は腕をゆっくりと前を出す

「お前は主人を愚弄した……それだけは許さない。氷水の神能・氷柱」
「ギヤアアア」

吹雪の前に現れた7本の氷柱が男の身体を串刺しにする

吹雪は昂樹の父親と、救出した人を連れて戻ってくる

「戻りました」

戻ってきた吹雪とその傍らにいる男を昂樹は見下ろす

「お疲れさん、こいつが俺の父親か。吹雪救出した人たちを匿名で病院に置いてこい」

「はっ」

吹雪は再度飛びその場を後にする

吹雪が去ったのを確認すると昂樹は男に話しかける

「久しいな」

「誰だ、お前は！」

「はあ、覚えてないか」

昂樹はポケットから一枚の写真を取り出しみせる
その写真を見て男は顔をしかめる

「なっ！お前はあの時の……」

「思い出したか？殴って家から出した子が俺だよ」

「……」

男は驚きで声を出せない

「俺はお前を殺して、組織を潰すために来た」

男は下から昂樹のことを見上げて話す

「なぜ……なぜ俺をあの子は殺さなかった」

「俺が命令した、俺が殺すから連れてこいと」

昂樹は今までにない冷酷な目で男を見下ろす

「くっ……（なんだこの威圧……）」

「俺はお前の子供だが、俺以外の、あのとき居た他の子はどうした？」

男は動揺したように昂樹から目をそらす

「あ、あれは……みんな捨てた！俺は誰も殺していない！命令されただけなんだ！」

昂樹はポケットからも一枚の写真を見せつける

「じゃあ、この写真はなんだろうな」

その写真をみた男は焦ったように声を漏らす

「なっ、それはそれをどこで！」

「お前は自分の子供を人体実験に使い、更なる強さを手に入れようとした、あつてるか？」

すると男は開き直ったように笑いながら声を出す

「くっ…… そうだよ！そうさ！俺は自分の子供を殺した、でも気にしてない、あいつらは俺の子供だが、俺のために生まれた、だから何してもいいんだよ！」

すると横に居たエキドナは小さく怒りの声を漏らす

「こいつ、なんで奴だ。許せない……子供は親を選べない、そんなことも知らないのか、誰がお前のためか、物じゃない、一つの命なんだよ！」

「知らないな」

昂樹は小さく声を出す

「お前は生きる資格はないよ」

昂樹の眼が蒼く、神秘的な色に染まる

「闇御津羽神」

父親の下に空間を開ける

「うわっ」

昂樹とエキドナも共に降りる

降りた先は何もない砂漠

「お前はこの空間に閉じ込める、地獄の苦しみの中後悔しながら死ぬ」

昂樹はそう言い残すと上に飛び空間から出ていく

外に出ると吹雪が舞っていた

「おかえりなさい、主人」

「ただいま、吹雪」

吹雪は昂樹の顔を見ると近づき手を握る

「大丈夫ですが？少しお疲れのようで」

昂樹は俯きながら力のない声を漏らす

「そう見えるかな？でも吹雪……復讐は何も得られないな。あの時少し俺に力があれば気付けていれば、少しだけの命を救えたかもしれないのに」

「主人、自分を責めないでください。前世もずっと貴方は後悔していた。でも、歩みを止めなかったからこそ貴方は強くなれた、だから、その気持ちを私達式神にも背負わせて」

吹雪は昂樹のことを抱きしめる

「吹雪は優しいな、ありがとう」

その頃空間に取り残された男は歩き始めていた

「くそ、ここはどこだよ、魔法も使えないし。くそくそ！暑いとりあえず水を」

だが、いつまで経ってもどこを見ても砂漠しかない。

3日後

「くそっつ、喉が、はあ、はあ」

男はその場に倒れる

「(そうだ、このまま死ねばいいそれで終わりだ)」

そのままゆっくりと目を閉じる

「はっ！ここは？」

男は起き上がりは周りを見る

「砂漠、またここなのか」

男は何度も何度も死んだだけか、死ぬことは出来なかった。

「なんでだよ！」

死ぬ、死に続ける

「なんで！なんで！！？」

男は最後に小さな声で、諦めたように声を漏らした

「ああ、そうか、俺は死ねないのか…」

昂樹が、雷神を潰している間に達也達は授業を終わらせ下校している

「今日昂樹さんはいないの？」

「確かにどうして？」

雫とほのかは達也を見る

「俺も気になっていた、エリカわかるか？」

達也はエリカが先生に早退連絡をしたことを知ってきた

「わからないわよ、突然体調が悪いつて言うからさ。」

「そうか、変なこと聞いて悪かったな」

「全然、気にしないで」

達也の家

「昂樹大丈夫でしょうか」

「あいつなら大丈夫だと思うが」

すると電話がかかってくる

達也はすぐにテレビの横のタッチパネルに触れ応答する

部屋が暗くなり、画面に軍人が映る

「お久しぶりです」

「久しぶりだな、特尉」

「その呼び名を使うと言うことは秘匿回線ですか、よくも毎回毎回一般家庭用のラインに割り込めるものですね」

「少し苦勞したがね」

「それで少尉、本日はどのような要件でしょうか？」

「今回は、我々軍と、警察が共同調査している、中規模組織「雷神」についてのことだ」

達也はその名を聞いたことがあった

「雷神ですか。あの、非人道的な人体実験のほか、一般人の殺害、薬漬けにして精神を壊すなど行なっている組織ですよ」

「そうだ、だが本日未明雷神の本拠地が匿名の報告により割り出された。これを見てくれ」

画面に何枚かの写真が現れる

そこには巨大な氷の柱のようなものが写っていた

その光景はまさに異様。達也はある疑問が浮かぶ

「これが、雷神の本拠地ですか。隠蔽魔法があるとしても氷で囲う意味は……」

「いいや、本拠地はこの氷の柱の中だ、何者かの、魔法攻撃と我々は考えている。この中を見てみたが、構成員の他、組長と思われる男も全員が殺されていた、そしてこの動画を見てくれ」

テレビに動画が現れ再生される

そこには無惨にも殺されて大量の血と肉片が写っていた。

「……だ……」

そう言い動画を止める少佐

「この右端、白い刀と和服のようなものが見えないか？」

「確かに……」

それを見た深雪は静に声を漏らす

「えっ……」

それに気づいた達也が深雪に話しかける

「深雪どうした？」

「いいえ、何でもありません……」

それを聞くと達也はすぐに動画に視線を移す

「この白い和服を来た人物が雷神を一人で壊滅させた……相当な実力ですね」

「ああ。この柱にしろ、中規模組織を簡単に壊滅させられる実力にしてろ。この後どのような命令が下るかわからんが特尉十分に警戒しておけ」

「承知しました」

「そしてもうひとつ、雷神の幹部の1人が見つかっていない。だが、その男のメモ帳に人体実際のことを書いてあった。やつは自分の子供を人体実験に使用していたと思われる」

それを聞いた深雪は

「なんて卑劣な」

「その中で1人行方不明と表記されている子供がいた。その子は、魔法が使えないとも書いてあった。だが、この世界において魔法が使えないことはあるのか、どんなに魔法力が乏しくとも、一つの魔法は使える」

「（魔法が使えない？それはまるで昂樹のことを言っているように思える。ただの偶然なのか……）」

達也は気難しい顔をする

「今回の話は終わりだ、時間を取らせてすまなかった、引き継ぎ1年前に起きた謎の戦略級魔法師「赤眼の悪魔」についての調査を続行してくれ」

「了解です」

14話 差別撤廃の討論会

次の日。生徒会による学内の差別撤廃をめざす有志同盟による公開討論会が行われた。

今真由美先輩が舞台上で演説をしている
その舞台横で達也や昂樹、摩利先輩など生徒会のメンバーがそれを見ている

「とまあ、こんなことが昨日あった」

昂樹は昨日早退あとの話を達也から聞いていた

「なるほど、その差別撤廃をやるうとする奴らが放送室を乗っ取ったのか、すまなかつたな昨日いれなくて」

「いいさ、昨日は大丈夫だったか？」

「大丈夫だ」

すると前にいる摩利先輩が口を開く

「討論会と言うより、真由美の演説のようだな。それにしても昨日の奴らが何をするかわからないのが不安だが、こちらから手出しはできんからな」

真由美先輩の演説が終わると1科生、2科生が拍手を送る

「やっぱあの人はすごいな」

すると後ろにいた深雪が話かけてくる

「昂樹、すこしお話よろしいですか？」

「ん？いいよ」

昂樹は深雪の後ろを少し歩き舞台の横にある薄暗い空間へと向かう。すると先に歩いていた深雪が足を止め振り返る

「昂樹… 隠さないで教えてほしいです」

深雪はいつになく真剣に、不安そうに昂樹を見つめる

「昨日、昂樹は中規模組織「雷神」の本拠地にきましたか？」

「…」

昂樹は深雪を睨むように見つめ何も話さない

「もし、俺があの場合にいたと言ったらどうする？」

昂樹が深雪を見つめるその目は冷たかった、まるで深雪を敵視する

ように。

普段の温厚な昂樹の姿から感じたことのない異様な圧に深雪は恐怖を感じる

「… 私は昂樹を… 攻めるつもりはないです… 広めるつもりも…」

「主… 殺しますか」

隣で吹雪が擬似顕現化し刀に手を触れる

「(吹雪絶対に刀を抜くなよ… ここは前世のような世界じゃない。すぐに人を殺して良いわけじゃない。そして深雪は数少ない友達だ)」

深雪は俯きながら口を開き話す

「ただ… 私は事実確認をしたくて。昂樹が私の家に来て星装顕符を使った時。昂樹の過去の記憶が少し見えてしまったんです」

「そうか… わかった。深雪。怖い思いさせて悪かった。謝るよごめん(深雪はたまたま俺の記憶を見てしまったに過ぎない、これは俺自身のミスだ。俺が今深雪を攻めるのは間違ってる。)」

「い、いえ。私が迂闊に聞いてしまったから」

昂樹は一旦深呼吸し、深雪を見直す

「ふう… とりあえず深雪は今まで通り接してほしい。過去の話と今回の雷神の件はまた後日深雪だけに話すよ。あとこの件は誰にも達也にも絶対に話さないでほしい。これだけは約束。」

「分かりました」

深雪がそういつた瞬間、上で爆発音が聞こえ舞台全体が揺れる
「なっ！」

昂樹と深雪は急いで舞台に戻ると会場は大きく荒れていた

同時に窓から何かが投げ込まれる

「(ガス弾!)」

「煙を吸い込まないように!」

すぐに服部先輩が魔法で煙と、ガス弾を同時に収縮し外に出す

「(気体の収縮と、移動魔法をあの一瞬で煙ごとガス弾を隔離したのか!)」

右側のドアから3人、左側のドアから5人ガスマスクをした何ものが突入してくる

右側は即座に摩利先輩がM I Dフィードでガスマスク内を窒素で充し無力化する

だが多勢に無勢、反対側に誰もつけていない

「死ねえ!!?」

全員が銃を発射する

「遅い... 神里流・紫氷雷斬」

すると吹雪が疑似顕現化し弾を一つ残らず斬ると、同時に雷のような速さで敵に近づき、全員を気絶させる

達也は壁際にいる昂樹を見る

「昂樹... いや今のは吹雪か、だがナイスだ」

全員を倒し、移動を始めようとする摩利先輩の無線が起動する

「侵入者? そっちにもか」

「委員長、俺は爆発のあった実技棟を見てきます。昂樹ついてきてくれ」

「うん、了解」

「お兄様、私もお供します」

「気をつけろよ!」

3人は実技棟方面に向かう、道中生徒とテロ集団があちこちで戦闘をしていた

「くそ、あちこちで戦ってる。死人が出てもおかしくないぞ(吹雪、できる限り怪我人を減らせ、頼んだ)」

「承知!」

吹雪は昂樹の命令を聞くと後ろに下がる

「急ごう、俺たちは俺たちの仕事をこなすぞ」

「おけ!」

遠くで侵入者と戦うレオがいた

さすがと言えばそうだが、レオも魔法には近接戦闘だと隙ができる
「くそ、まずい」

「七聖魔装」

昂樹の背中に7本の槍のようなものが現れ発射される

「ぐはっ」

昂樹から放たれた槍は綺麗に一带全ての侵入者に直撃し、気絶させる

「昂樹！こりゃ一体…」

「レオ！っと、援軍が到着してたか」

走ってきたエリカは武器を持ってきていた

「二人とも、取り敢えずこっちに」

5人は物陰に退避する

「テロリスト？なら問答無用でぶっ飛ばしてもいいってことね！」

エリカはかなり強気で武器を振る

「生徒でなければ手加減無用だ。それと、侵入者は他に見なかったか？」

「彼らの目的は図書館よ」

後ろから声がかかる

「小野先生？」

「主力はすでに侵入しています、壬生さんもそっちにいるわ」

「後程ご説明をよろしくお願いします」

「却下します。…と、言うわけにはいかないわね、条件があります。カウんセラー小野遙として、壬生さんに機会を与えて欲しいの。彼女は剣道の評価と、2科生としての評価のギャップに悩んでいたの。私の力が足りなかった、だから彼らに漬け込まれてしまった。だから」

「甘いですね、行くぞ深雪」

「はい」

2人は歩き出す

「おい、達也！それはちよっと冷たいんじゃないか？」

その言葉に達也は足を止め、振り向く

「レオ、余計な情けで怪我をするのば自分だけじゃないんだぞ」
達也は走り出す

「おい達也ー！」

レオを含め小野先生以外が達也を追いかける

少し移動して

「(すでに乱戦模様だな)」

「うおおー」

後ろからレオが飛び出し達也の前に出る

「レオー！」

「パンツァー！」

レオの腕に装着された武器に魔法式が現れ侵入者の顔にパンチをぶち込む

エリカは呆れたように声を出す

「音声認識って、またレアなものを」

「(パンツァー、エキドナの知識だと、収束系の系統魔法で、全身防衛の硬化魔法。レオがCADでこの魔法を発動する際の音声認識コマンドでもある。CADにどれだけ強い衝撃を加えても、パーツの相対座標がずれないように固定し壊れないようにしているらしい)」

「お兄様、今展開と構成が」

「ああ、縮絨展開だ。10年前に流行った技術だ。」

「あいつって魔法までアナクロだったの」

その時レオのCADと侵入者の刀が激しくぶつかる

「よく壊れないわね」

「CAD自体にも硬化魔法をかけているな」

「レオ、先に行くぞ！」

「おうよ引き受けた！さあこい！」

図書館前

「(い)ね...」

「エリカ待て！」

すると近くの木の影から影が飛び出して、エリカに斬りかかる
「つつー！」

エリカが一瞬のことで動けないなか昂樹がエリカの前に出て背中
の七聖魔装でシールドを展開する

昂樹はシールドで男を押し出し距離を離す

「こいつ、只者じゃないな。ここで時間は避けない）達也！2人を連
れて先に行け、ここは俺が引き受ける」

「すまない」

「気をつけて！」

3人は先に図書館に入る

「数は減ったが、まあ良いか。私は炎という」

忍者の様な黒い服を身にまとっている。声質的に男だろう

「コードネームか？」

「そのようなものだ…」

「そうか…」

「時間がないな。一気に決める」

炎が一気に突きをしながら詰めてくる

「神里流・流水」

昂樹はその突きを軽々と受け流し、流れるように刀を振る

炎はそれを躲し、再度刀を上から振りおろす

「神里流・神速雷切」

昂樹は素早く後ろに回ると突きをする

火はギリギリで右側に躲す。だが一瞬の隙が生まれる

「くっ、速い」

「そう避けると思ったよ」

昂樹は突きの姿勢から刀を横に振る

「神里流・飛車」

炎はギリギリで体制を立て直して剣でふせぐ

「はあ、はあ、強い」

「炎、そんなものか？」

昂樹は威圧を込めて言葉を発する

「そうか… 私では敵わないか… だが！火龍」

炎は構えると剣に火を纏わせ、龍のように素早く向かってくる
周りが灼熱のように燃え上がる

「我が秘術、おまえといえどこれは躲せまい！」

「いや、遅いな」

昂樹は軽々と躲す

「まだだ！」

昂樹が躲したと同時に剣を横にふる

数回の攻撃を昂樹は一步も動くことなく受け流す

「馬鹿な、我が流派最速の技だぞ!!？」

「なるほど、じゃあ、こっちも少し本気を出そう」

「少しだと…」

「八咫鳥（やたがらす）」

昂樹がそういった瞬間、目にも止まらぬ速さで炎に近づき

体を×の形に斬る。その瞬間黒色の羽があたりを静かに舞う

「な…」

「二星（ふたつぼし）」

「ゴフツ」

炎はその場で崩れ落ち、昂樹は刀を鞘に納める

すると周りに落ちていた黒い羽も消える

倒れる炎の横を進み昂樹が図書館に向かおうとすると炎が口を開

く

「お前は強いな…恵まれている才能だ」

「才能だと…？」

「炎、お前には俺の刀が、剣術が才能だと思っているのか？」

それならお前はまだまだだ。1からやり直してこい。そして、お前
がこんな外れた道から戻って真つ当な剣士になったらまた戦ってや
るよ」

「才能じゃないなら、お前の強さはなんなんだ」

炎はゆっくり起き上がると昂樹の方を見る

「俺の強さか…諦めないことかな。どんなに辛くても逃げたくても、諦めない心があれば強くなる。俺は何人も仲間を失ってきた。親友も愛人も全て。でも、みんな言うんだ「生きろ」ってさ。だから俺は生きて生きて苦しんで、結果がどうか、そんなのは関係ない。最後は諦めないやつが勝つんだ。だからさ炎

お前も頑張れよ、自分の弱さに気づけた時が強くなれる時だと俺は思う。もし悩んだら俺のところに来いよ」

昂樹は炎の体に触れ不死鳥の力で傷を回復させる

「なにを…」

「さあな。これは俺の勝手だ（お前は俺に似てる。だからこそ気づいてほしい）」

「…俺は、強くなりたかった」

「なら今からでも遅くないさ、やり直せる。それはおまえ次第だけだね」

「そうか、わかった。頑張ってみるよ」

「頑張れよ」

「俺の名前は黒鉄炎樹（くろがねえんじゆ）」

「炎樹かいいい名だな」

昂樹はそう言うとう図書館へ向かった

図書館に入ると気絶している壬生先輩を支えるエリカがいた

「昂樹、大丈夫だった？」

昂樹は前々からエリカの強さを知っていたからわかる

「大丈夫だったよ、それよりエリカ。本気で戦ったのか？」

「ええ、そうね」

少しして、保健室では壬生先輩がこれまでのことを話していた。

「摩利先輩の剣技を見て、感動したんです。そして、先輩にご指導をお願いしたんですが、素気無くあしらわれてしまって」

「なに？それは本当なのか？」

「壬生先輩は嘘をついているようには見えない。でも摩利先輩がそんなことをするのは到底思えない。なんだこの違和感!」

「はい。お前では無駄だ、自分にふさわしい相手を選べと!」

「ちよつと、ちよつと待て、その時のことは覚えていて。だか、私は素気無くあしらったりしていないぞ、私は確かあの時こう言った。私の実力では到底つとまらない、だから、お前の実力に見合う相手と稽古してくれと!」

すると真由美先輩は摩利先輩を見る

「まっつて、じゃあ摩利は、壬生さんの方が強いから、辞退すると言ったの?」

「だって、魔法を絡めれば私の方が上かもしれないが、純粹に劍技を極めた壬生には到底及ばない!」

「じゃあ私の誤解だったんですか?」

そこからは泣く壬生先輩を達也が宥めて落ち着かせていた

壬生先輩が落ち着くと達也が口を開く

「さて、侵入者と、関わりのあるブランシユの奴らがどこにいるかですか!」

「達也くんまさか、彼らと一線交える気なの?」

「いいや、真由美先輩。叩き潰します。達也も多分同意見かと!」

「そうだな。」

摩利先輩も真由美先輩も流石にこのことを止める

「危険だ、学生の部を超えている。」

「私も反対よ、学外のことには警察に任せるべきだわ!」

「そして、壬生先輩を家裁容疑で刑務所送りにするんですか?」

達也のその言葉に全員が口を閉じ、静寂が起こる

「なるほど、警察の介入は好ましくない、だからと言ってこのまま放置するわけにはいかない。だかな、相手はテロリストだ、当校の生徒に命をかけるとは言えない。」

「当然からと、初めから他の力を借りる気はありません。昂樹が付いてきてくれるだけで戦力としては十分すぎるほどです!」

その言葉に深雪、エリカ、レオが続く

「お供します」

「一緒に行くわ」

「俺もだ」

壬生先輩は焦ったように言う

「達也くん、私のためならやめて」

「いいえ壬生先輩のためではありません。深雪と俺の学校生活を損なおうとするものは、全て駆除します、これは俺にとって最優先事項です」

「お兄様、しかしどうやってブランシユの拠点を調べましょう」

部屋の中に1人の男が入ってくる

「私が教えましょう」

「何者だ」

達也はすぐに警戒し構える

「待て、達也。大丈夫だ、敵じゃない」

「昂樹さん、こちらをみてください」

炎樹は昂樹の近くに来るとタブレットを差し出す

「なるほど、放棄された工場。ここが本拠地か。」

「昂樹、この男は信頼できるのか？」

「大丈夫だ」

「車は俺が用意しよう」

「え？十文字くんも行くの？」

「十師族として当然の務めだ」

「じゃあ！」

それを昂樹は止める

「真由美先輩それはダメです。この状況の中生徒会長が不在になるのは良くない事態です」

真由美先輩は少し悔しそうだったが昂樹の話を聞いて引き下がる

「……了解よ。でも摩利あなたもよ、残党がいるかもしれないのに風紀委員長がいなくなるのもダメだわ」

「わかったよ」

達也、深雪、昂樹、エリカ、レオ、炎樹、十文字が車に向かう
そして十文字が車に乗ろうとすると

「会頭、俺も連れて行ってください」

「なぜだ桐原」

桐原は刀を強く握りしめる

「一校生として、このようなことは見過ごせません」

「ダメだ」

「会頭！」

「その理由では命をかけるにしては軽すぎる」

「ぐっ…」

「もう一度聞く、なぜだ」

「俺は中学時代の壬生の剣が好きでした、人を斬るための俺の剣とはちがいで、純粹に技を磨く剣を綺麗だと思いました。でもいつのまにかあいつの剣は曇っていました、俺はそれが気に食わなかった」

「だから、乱入というマネをしたのか。」

「壬生を利用して、動かした人間がいるはず。俺の八つ当たりです！お願いします！」

桐原は深く頭を下げる

「いいだろう男をかけるには十分な理由だ！」

「会頭…ありがとうございます」

車で本拠地に向かう

「司波、お前が考えた作戦だ。お前が指示を出せ」

達也は一瞬驚いていたが冷静に説明を始める

「はい、レオは退路の確保。エリカはレオのアシストと逃げ出した奴を始末してくれ。俺の深雪は正面から、昂樹と炎樹は左の裏口から、十文字先輩と桐原先輩は右の裏口から侵入してください」

「了解！」

「見えたぞ」

「今だレオ！」

「パンツァー！」

車に硬質化魔法が付与される

そのまま、車は正門を破壊して侵入し全員が車から降りる

「では、作戦通り頼む！」

達也と、深雪は正面から、十文字、桐原、昂樹、炎樹は裏口からエリカ、レオはその場で待機する

「まさか炎樹が助けに来てくれるとはね」

昂樹は裏口を開けながら話しかける

「はい… あなたについて行きたくて。昂樹なら俺の知らない何かを」

昂樹は炎樹に笑いかける

「そうかよ… なら俺のもとで強くなるか？」

「いいのか？」

「ああもちろん。だけど教師はすぐくスパルタだぞ？」

「こなして見せる」

すると前から10人以上の男が向かってくる

「炎樹見てて」

昂樹は刀に手を置き、素早く刀を引き抜くと同時に刀を振る

「神里流・紫龍裂斬」

昂樹の刀から放たれた紫色の斬撃は一人の男に触れた瞬間全体に渡り時空が割れるように広がりあたり一面を斬り刻む

その光景に炎樹は声を出せない

すると昂樹は刀を鞘に納めながら後ろを向く

「炎樹にはこれぐらい強くなってもらわないとね！」

少しして、全員で工場から出てくる

「終わったのか？」

「そうみたいね、出番なしかーつまんないの」

そこからは十文字指示のもとのこの一件は終わりを告げた

その後壬生先輩と、桐原先輩が付き合ったことは秘密にしておこうか